



# 甲虫ニュース

No. 156  
December 2006

## COLEOPTERISTS' NEWS



佐藤正孝博士 (1937 -2006)

### 佐藤正孝博士追悼号

Dr. Masataka SATO Memorial Issue

#### 追悼記事目次

- 佐藤正孝さんを偲んで 大平仁夫——2  
佐藤正孝さんの思い出 大澤省三——2  
渡せなかった大雪山のマメゲンゴロウ 堀 繁久——3  
佐藤正孝先生の死を悼む 上手雄貴——4  
佐藤正孝さんの逝去を悼む 渡辺泰明——5  
いつも温かかった佐藤先生の思い出 伊藤 昇——5  
佐藤先生と採集したセマルヒメドロムシ 中島 淳——6  
恩師 佐藤正孝先生 奥島雄一——7  
ムゴジマトラカミキリ 新里達也——8  
佐藤正孝先生を偲んで 川島逸郎——9  
佐藤先生の思い出 斉藤明子——10  
佐藤正孝先生を偲んで 吉富博之——11  
佐藤先生と「図説 日本のゲンゴロウ」 森 正人——11  
佐藤先生の思い出 高橋和弘——12

## 佐藤正孝さんを偲んで

大平仁夫

名古屋育ちの昆虫学者の中で、佐藤さんは異色の存在であった。向陽高校1年ですでに科学クラブの機関誌に「東山の甲虫」を報告されている。愛媛大昆虫学教室を経て名古屋女学院短大(現在の名古屋女子大)の助手になり、平成15(2003)年に教授で定年退職し、こんごは好きなことをやりたいのと言われていたが、69歳の生涯を終えるまで、いつもあたふたと動きまわっておられた。今思えば、健康な体、よき伴侶、よき友人、よき運に支えられての生涯であったように思われる。

愛媛大の在学中は講義にはあまり出なく、トカラ列島や琉球列島や台湾などの調査に熱中し、周辺から「単位は大丈夫か?」と心配されていた。しかし運よく卒業、名古屋女子短大の広教授の助手になった。女子短大には「生活科学研究所」があり、主として水生昆虫の調査に従事し、「矢作川の自然」なる印刷物は同氏の力が大きい。また、岡崎におられた(故)神谷一男先生の研究室にも甲虫関係の文献を見によく出入りされていた。佐藤さんは教授になり、学部長や図書館長なども歴任し益々多忙であったが、政府や県関係の委員もこなし、一方では図説や教科書なども出版され、学会では日本鞘翅学会や日本昆虫分類学会の設立にも関与されたりしておられたが、海外への調査の情熱は少しも衰えることなく、ベトナムやラオスを始め韓国や中国にも出掛けておられる。

名古屋市千種区で薬局を営まれていた山中妙子さんと結婚、上品な名古屋弁で話す才媛で、精神・物質両面で佐藤さんを献身的に支えられた。のち病で不自由な身でありながら、佐藤さんの傍らに付き添って世話をされていた。佐藤さんの親友の上野先生は、妙子さんの葬儀のとき「妙子さんには色々お世話になって…」と話されていた。妙子さんが亡くなられたあと、しばらくして風間寿美子さんと再婚されたが、この方は民族学研究者で、共にベトナムやラオスに出かけて調査されており、その一端は

## 佐藤正孝さんの思い出

大澤省三

日本の甲虫学界の重鎮の一人である佐藤さんが亡くなられた。まことに痛恨の極みである。佐藤さんと私はともに名古屋人だが、年代の違いもあり、佐藤さんは愛媛大学に、私は名古屋大学から広島大学へと転々としていたので、若い頃は交流がなかった。私が広島から名古屋へ戻ってからは、名古屋昆虫同好会や、鞘翅学会名古屋支部の会でしばしばお目にかかるようになった。名古屋女子大の佐藤さん



写真 若き日の虫屋の談話会で [前列左から佐藤、穂積、石田(昇); 中列左から(故)後藤、右端は(故)森部; 後列左から(故)成瀬、大平、市橋](IV-1957)

「ラオスの風」なる印刷に詳しく記されている。

69歳と言えば、昔ならまああの年齢であるが、今はまだその若さでの時代である。これから円熟味が加わり、期待が多きかっただけに本当に残念である。佐藤さんは「ラオスの風」にあるように、膨大な多方面の仕事をごなし、サーッと人生を走り抜けて行かれた昆虫学者であったように思われる。

これからの別世界の中でも、「オットット」「オットット」とつぶやきながら、長い旅路での折々の出合いをされていると思われる。ご冥福を心からお祈りする次第である。「オットット」の意味は「ラオスの風」の18頁を参照。

## 参考資料

- 佐藤正孝(1953) 東山の甲虫. *Biology*, (1): 22-28.  
 ——— (1969) 東南アジア予備調査報告. *名古屋女子大学紀要*, (15): 101-112.  
 ——— (1971) フィリッピン<sup>5</sup>の虫を訪ねて. *春光*, (9): 1-5.  
 風間寿美子・佐藤正孝(2003) ラオスの風—サルイ村滞在記・他—(風野書房刊)

(岡崎市舞木町)

の研究室へお邪魔したとき、まず驚いたのはものすごい量の標本であった。標本室にはいらないので、廊下にまで積み上げてある。毎年何回も、中国、フィリッピン、東南アジアと採集旅行にでかけられていたので、当然といえば当然だが、そのすごい馬力は驚嘆した。「こんなに標本があると、調べるのが大変でしょう」という問いに「研究のほうと平行して資料を集めているが、定年退職して、あまり採集に出られなくなったときの楽しみですよ」と。佐藤さんはかつて心筋梗塞を発症、さる病院の名医のおかげで回復された。「別の病院だったら今頃生きてはいませんよ」と言っておられた。私も数年前、同



写真 2005年度鞘翅学会の懇親会にて、右：佐藤さん；左：筆者

じ病気となり、やっと回復したので佐藤さんも私もラッキーであったといえる。佐藤さんはそれでも、その都度医師の許可をもらった上で海外調査を精力的につづけられていたのには、脱帽である。

定年退職後も元気で海外の採集調査に出かけられていることを、昨年の鞘翅学会や、甲虫学会のうちに伺っていたが、その後体調を崩され入院されていたことは全く知らなかった。退院されてからのメールによると「10時間にわたる大手術で超奇跡的に救われた。入院生活80日余り。しばらくはデスクワークしかできないが、回復したらまた野外活動をしたい。それにしても、発病前にチベットへ行ったのは幸であった。研究のほうは、若い優秀な連中がたくさん育ててきたので、かなりの部分を彼らに任せられるようになって嬉しい」とのことであっ

### 渡せなかった大雪山のマメゲンゴロウ

堀 繁久

2006年の春、佐藤先生から一通のメールが届いた。内容は、大雪山の奥座敷と呼ばれるトムラウシのマメゲンゴロウを採ってきてくれないか？ というものである。トムラウシと言えば、日本百名山の一つで、岳人憧れの山、何処から登っても距離があり、覚悟して登る山と決めていたので、おいそれとは「採ってきます」とははっきりと確約できずに、もし、登る機会があったら採ってきますという煮え切らない返事を返した覚えがある。その後も何度も依頼のメールが入り、メールの内容もかなり差し迫った雰囲気か漂っていて、ようやく登る覚悟を決める。丁度、その頃「探そう！ ほっかいどうの虫」という昆虫採集本の出版を控え、その原稿等に追われていて、その本が8月4日に完成した。それまでは、デスクワークに追われ、フィールドに出られずにすべて後送りしていたため、8月の途中から大

た。そして、たくさんの研究論文の別冊を送っていただいた。一日も早くまた元気な佐藤さんとお会いできると心待ちにしていたのに、突然の訃報に接し、言うべき言葉をしらない。佐藤さんの訃報より少し前には佐々治さんがなくなられた。また、私は面識がないが、ハムシの小宮さんも亡くなられたと聞く。まさに日本の甲虫界にとって最悪の年である。

私の名古屋大学在任中と、それにつづくJT生命誌研究館時代、何度も台湾へ採集旅行に出かけたが、そのとき、陳文龍さんから多数の雑甲虫を提供された。その中に光沢があり、上翅が赤、前胸が黒い大型の美しい甲虫が一頭あった。私はクシヒゲだと思ったが、どうも違うようなので、数人の専門家に写真を送って意見を伺った。ある方はハムシのようだと言ひ、別の方はカッコウではないか、ということであった。結局、所属不明なので、標本を中根先生に送ったが、そのうちに見ておきましょう、と返事をいただいたままになってしまった。写真だけは手元にあったので、鞘翅学会名古屋支部の会の席上、佐藤さんに見せたところ、これはハムシでもカッコウでもなく、Dascillidaeの一種で、これまでベトナムからしか知られていない属だ、ということであった。その後、余清金さんから、同種の標本を2頭いただいたので、佐藤さんと私の共著で *Metallidascillus sasajii* と命名してSUKUNAHIKONA (佐々治寛之博士退官記念論文集) にのせた。佐々治さんも佐藤さんも相次いで亡くなられたが、ある意味では両人と私をつなぐトライアングルの存在の忘れ難い甲虫である。なお中根先生のところへ送った標本は、多分北大の中根コレクションの中にある。慎んで佐藤さんのご冥福を祈りたい。(広島市東区)

丈夫か？と思わず言ってしまうような、ハードスケジュールのフィールド調査を入れはじめたところであった。

手始めに、佐藤先生との約束を果たすため8月5～6日の一泊で、トムラウシのゲンゴロウ調査に入る。8月4日、仕事終えた夜半に今回の調査の相棒としたゲンゴロウ大好き岡田青年を連れて出発し、早朝に登山口に到着した。ほとんど寝ないで長距離ドライブをして登山口まで来たので、そこで1時間ほど仮眠してから登山を開始する。やはり、睡眠不足でトムラウシはちょっと無謀だったと思い知りながら、ヘロヘロしながら登り続け、途中の池をチェックしながら、夕方日暮れ前に、どうにか宿営地の南沼のキャンプ指定地に到着した。周囲の沼をチェックするが、*Agabus* のいる池と全くない池があり、不思議である。池によって、水温も生息している生き物も違っているようだ。その夜は遭難者が出て、採集許可の腕章をしていたため、その対応を登山者から依頼された。どうにか携帯のつながる場所を探して、家族へ連絡をつけた。翌日、ヘリコ

プターと捜索隊が上ってきたがその日は見つからなかったようである。後日、下の林道で釣り人により保護されたことをニュースで知る。生きて戻ったようで良かった。翌朝のトムラウシは濃いガスに包まれていた。迷わないように気をつけながら、奥の池の調査を済ませて下山する。かなりの強行軍での登山&ゲンゴロウ調査であったが、ぼっと見た感じでは3種の *Agabus* が採集できたので、これで、ようやく佐藤先生との約束を果たせたと安心する。下山後、温泉に入ってから、安全運転で札幌へ戻り、翌朝は知人の山内英治氏とカヌー2艘積んで、東京から釧路入りしている松澤春雄氏を拾って、釧路湿原でキタキヒロネクイハムシの調査に入った。こちら、成虫こそ確認できなかったが、幼虫と蛹をホストから得ることができ、どうにか最低限の結果を

持ち帰り、このネクイハムシを気にかけられていた小宮義璋先生の墓前に成果を報告できると思っていたのだが、飼育した結果、なんとイネネクイハムシが羽化してきたのである。

大雪山から引き続いた釧路湿原の調査から戻ると、佐藤先生逝去という訃報のメールが飛び込んできた。ようやく、約束のゲンゴロウを渡せると思った矢先に、その思いは水泡に帰する。永遠に渡せなくなってしまった。もし、佐藤先生の遺志を継いで *Agabus* の分類をやってみようという方は、サンプルを提供させていただくので、是非連絡されたし。

最後までゲンゴロウの分類に気をかけてられていた佐藤先生の冥福を心から祈りたい。合掌

(北海道開拓記念館)

### 佐藤正孝先生の死を悼む

上手 雄 貴

私が佐藤先生に初めてお会いしたのは、1997年のことであった。当時東京農業大学オホーツクキャンパス1年生で、北海道のゲンゴロウ調査をしているうちに種がわからないものが出てきた。そこで東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明先生に相談したところ、佐藤先生を紹介していただき、手紙を出したことがきっかけである。ぜひ一度名古屋女子大学においてくださいとのご返事があり、お邪魔することとなった。その後は私の実家が岐阜市であったこともあって、岡々しくも度々お邪魔することになってしまった。先生は本当に温厚な方で、お忙しいなかでも私のつまらぬ話に耳を傾けてくださった。

先生とご一緒した採集でとても印象に残っているものがある。それは2003年7月に緒方健氏と中島淳氏の案内で福岡県へヒメドロムシを探しに行ったことである。そのときは福岡でも記録的な大雨で博多駅も水没していた。おそらくヒメドロムシの生息する河川も採集できるような状況ではないだろうと感じてはいたが、せっかく来たのだしとりあえず生息地へ行ってみることになった。行ってはみたものの、やはり河川は濁流となっていた。もう少し上流へ行けばまだましかもということで一同移動しかけたことである。先生が一言「あの端の辺りでやれば採集できる。」と。先生がやれると言われるのであればやれるに違いないということで、一同濁流に飲み込まれそうになりながらも採集に励んだ。結局そのときには一番の獲物であったセマルヒメドロムシを採集することはできなかった。しかしその年の12月に再び同地を訪れリベンジを果たすところに先生の甲虫に対する並々ならぬ情熱を感じることができた。

先生には東京農業大学卒業後も愛媛大学大学院進学、環境科学株式会社就職、そして現在の名古屋市



写真 2004年2月1日 佐藤先生のご自宅にて台湾からいらしたヒラタドロムシ研究者の歓迎会。左から佐藤先生、Chi-Feng LEE氏とそのお連れの方(お名前を失念しました)、右端は上手

衛生研究所転職と研究する環境が変わるたびに様々なアドバイスを頂いた。また最近先生と共著で記載したツブゲンゴロウ属の論文では、私のチェックミスのために8万円も余計にお金がかかる事態になってしまった。しかし先生は「今度からはよく原稿のチェックをするように。」とおっしゃられただけで全額を負担してくださいました。このような懐の大きさも先生がいろんな方から愛されている理由のひとつであろう。近年は先生のご自宅の近所に住んでいたこともあり、自転車を走らせてはご自宅へお邪魔して水生甲虫の話や愛媛大学の話など様々な話をお聞きした。また研究に必要な標本やパラタイプも頂いた。おそらく迷惑だったこともあったはずだが、先生はいつも暖かく迎え入れてくださった。まだまだ先生から学ぶべきことはたくさんあったのに、これほどまでに早くに亡くなられ残念でならない。先生の期待を裏切らぬように、毎日自分自身を戒めながら研究を継続していきたいと思う次第である。

(名古屋市衛生研究所 衛生動物室)

## 佐藤正孝さんの逝去を悼む

渡辺 泰明

佐藤正孝さんが亡くなったことを知ったのは、私自身老化に伴う身体の衰えをリフレッシュするために、山形県の温海温泉に長逗留し帰宅した8月22日だった。留守中に届いていた、8月9日に佐藤さんが亡くなったという妹尾俊男本誌前編集委員長からの手紙に驚くと同時に、俄かには信じられない思いだった。それというのも、8月初旬に佐藤さんが再入院されたことを奥様から知らされていたが、自宅では佐藤さんが退院後間もない体で無理な生活をされていると聞いていたので、病人管理の行き届いた病院での療養生活の方が病人のためには良いだろうとの思いがあったからである。しかし、この思いは甘い判断だったようで、今となってはお見舞いにも伺わず、葬儀にも参列できなかつたことが悔まれてならない。

佐藤さんとは虫屋仲間として、良き友として長年にわたるお付き合いだった。そして、この交際を通して佐藤さんの行動力に富んだ積極性と、細やかな心遣いを感じさせる人柄から多くのことを教えられたように思っている。学会や同好会の会合でお会いするたびに、国内外での採集談を楽しく聞かせていただき、時にはそれら採集品の一部を研究用にとご恵与されることがたびたびだった。これらの標本に基づいて私は数編の学術論文を発表させていただいたが、このような佐藤さんの気配りは私ばかりでなく、多くの同好者に対しても同様で、研究上に必要な文献のコピーや標本を惜し気もなく援助された。また、後進の人たちに対する指導・育成の面でも積極的に行動され、その面倒見の良さには常に敬服させられた。佐藤さんの学術論文の中に、私を含めて



写真 2002年4月20日：新宿京王プラザホテルにて

国内・国外を問わずさまざまな人たちとの共著論文が多く見られることはこのことを如実に示している。

生活面での佐藤さんは、虫屋仲間では数少ない下戸の一人だった。それにもかかわらず、虫屋仲間の懇親のための酒席には必ず出席されて、ご自身はアルコール抜きで昆虫に関するさまざまな情報を同席者に披露されるのが常だった。しかし、もはやその佐藤さんの温顔を接することが、心暖かくそして抱容力豊かな話も聞くこともできなくなったことは何としても痛恨のきわみである。今頃は三途の川でドロマシの採集を楽しまれておられるだろうか、それとも先に逝かれた黒沢良彦博士をはじめとする物故甲虫屋仲間を迎えられて、賑やかな虫談に花を咲かせているだろうか。そんな楽しく過ごしている天界の佐藤さんの姿を想像しながら、心からのご冥福を祈り上げる。

(東京都町田市)

## いつも温かかった佐藤先生の思い出

伊藤 昇

その知らせは突然にやってきました。数日前に佐々治先生の訃報に接したばかりで、相次ぐ訃報に言葉をなくしました。今年3月には大手術を克服されましたが、その折にはお体に障ってはいけないと思い、お家のほうへお見舞いのお便りを差し上げましたところ、すぐにお返事をいただきご回復の早さに驚きながら喜んだものです。4月下旬には早くも“リハビリも兼ねて活動を少しずつ開始しました。手始めに、別刷りをお送りします。”というお便りを、たくさんの貴著別刷りとともにいただきました。その1カ月ほど後に“台湾のゴミムシ同定のお願いですか、いかがでしょうか”というメールをいただき、これで本当にひと安心と思いつつお引き受けいたしました。それからわずか2カ月後の訃報です。お元気な時は、常に活動的で年に何度も海外に

出かけられ、いたって健康的な日常生活を送っておられただけに、なぜこんなに早く?? という思いが募るばかりです。思えば、3年前にご退官記念論文集が出たばかりです。

先生との本格的なお付き合いは、10年ほど前に“私が採集してきた今までのゴミムシを見ませんか”という先生からのお言葉で始まりました。早速名古屋女子大の研究室にお邪魔し、標本を借りに上がりました。お忙しいにもかかわらず、初めてお伺いする私のために標本のスクリーニングを終日お手伝いいただき、一日があっという間に過ぎました。学生さんと一緒に昼食に出かけた折には、ざっくばらんに学生さんたちが先生に話しかける風景に、温かくて気さくな先生のお人柄が窺えました。拙著をお渡しすると、慌てながらたくさんの別刷りを取り出していただきました。私ごときの別刷りに対するそのお姿が、アマチュアにもプロにも分け隔てなく接しておられた先生の姿勢をよく表しているエピソードでしょう。結局先生のお部屋には3度お伺いしまし



写真 2002 年 Japan Coleopterists' Meeting にて  
左から二番目が佐藤先生

た。以来何かと懇意にさせていただき、お礼の意味で、“satoi” もいくつか記載いたしました。少しですが、ゴミムシの文献収集のお手伝いもさせていただきます。先生はグループで中国へ出かけておられますが、どういふわけか同行された方とは違う種を採集しておられます。中国ですから勝手に好きな場所へは行けないはずですが、同じ場所でも目の付けどころが違うのでしょうか。独特の採集勘を持っておられたようです。

#### 佐藤先生と採集したセマルヒメドロムシ

中島 淳

佐藤先生とはじめてお会いしたのは 2003 年 7 月でした。その前の年に、私は偶然にも福岡県で九州初記録のセマルヒメドロムシ *Orientelmis parvula* を採集したのですが、その話を聞いてはるばる採集に来られたのです。採集場所に向かう車中、佐藤先生からは色々なお話を伺いました。セマルヒメドロムシがすでにタイ産地から消えてしまったこと、非常に謎の多いヒメドロムシであること、などその他にも次から次へと水生甲虫に関する様々なお話を伺い、その情熱に圧倒されたのを覚えています。さて、肝心の採集のほうですが、折からの雨続きの天候の影響で川は大変増水しており、川に降り立つのも困難な状況でした。これはやめたほうが良いのでは…そう思った瞬間、佐藤先生はバッと河川敷に飛び降り、採集をはじめてしまいました。驚くと同時に、これは負けては行けないと、同行した皆で先生のあとに続いて河川敷に飛び降りて採集を行ったのを覚えています。この時は、やはり増水の影響で採集できず、佐藤先生は大変残念そうでした。ところが、2003 年度の鞘翅学会大会は 12 月に九州大学で行われたため、再び福岡に来られた佐藤先生は、学会終了後 12 月の川にリベンジとばかり採集に向かったのです。私もお供として参加しました。ここ

研究室にお邪魔した時の虫の歓談、採集会や学会での懇親会…、いつもにこやかに穏やかなお人柄を感じる先生のお顔が、昨日のこのように浮かんできます。先生は、教職やご研究など多忙なご本業以外に、官庁から依頼された多くの仕事を抱えておられました。おそらく、頼まれると否とはおっしゃれない先生のお人柄がそうさせたものと思っておりますが、様々なご負担が先生の寿命を縮めてしまったのでしょうか。

先生との人としてのお付き合いが絶えてしまうことは、もちろん寂しい限りですが、同じくらい残念なのは、最も熱心に取り組まれていた水生甲虫関係分野で、先生ほどの専門家が日本で不在になってしまうことです。日本以外のアジア地域の研究はこれからですから、先生のご逝去は、日本のみならず世界の甲虫界にとって大きな損失といわざるを得ません。固より先生ご自身が最も研究の発展を願っておられたでしょうから、道半ばでのご無念は計り知れません。もちろん先生のご偉業は水生甲虫研究にとどまるものではないことは、付け加えておきます。

先生のご厚意のお礼を申し上げたくても、もうご冥福をお祈りするしかないのが本当に残念でなりません。天国の蓮の池で、ゲンゴロウ採集を楽しまれておられることを心より祈っております。合掌  
(兵庫県川西市)

でも先生は率先して 10℃ を切る冷たい水に網を入れ、今度は見事狙いの九州産セマルヒメドロムシを多数採集されておりました。満面の笑みで、良かった、良かったと仰る佐藤先生を拝見して、自分ももっとも情熱を持って水生昆虫を採集しなくては、と思いを新たにしたことを思い出します。九州のセマルヒメドロムシについては、その時の調査結果をもとに、佐藤先生により、「Recent records of *Orientelmis parvula* (Coleoptera, Elmidae) in Japan, with a proposal for conservation」という論文にまとめられ、また共著として加えていただきました。私の中では非常に思い出深い、忘れられない論文となりました。

最後にお会いしたのは、岡山での鞘翅学会でしたが、その後もいくつかのやりとりを行い、多くのことを教えていただきました。佐藤先生が日本の水生甲虫研究の分野で打ち立てた功績の数々は大変偉大なものであったと思います。佐藤先生は、海のものとも山のものともわからない若い学生であった自分にも、大変親切に様々なことを教えて下さいました。今後、その教えを無駄にしないためにも、さらに努力して何らかの形で水生甲虫の研究に関わっていきたくと思っています。それが佐藤先生の一歩喜ばれることではないかと、信じています。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(九州大学大学院水産実験所)

## 恩師 佐藤正孝先生

奥島雄一

その日は朝から外の仕事が入っており、大林延夫先生からの早朝のメールを読んだのは夕方近くになってからだった。佐藤正孝先生の訃報を知らせる内容であった。つい前の晩に上野俊一先生から油断をゆるさないご容態であることを伺っていたので、「もしや」ということを考えずにはいられない心境ではあったが、まさか、こんなにも早く逝ってしまわれるとは、先生ご自身のこれからやりたいことがまだまだあるご様子を伺っていただけに無念でならない。

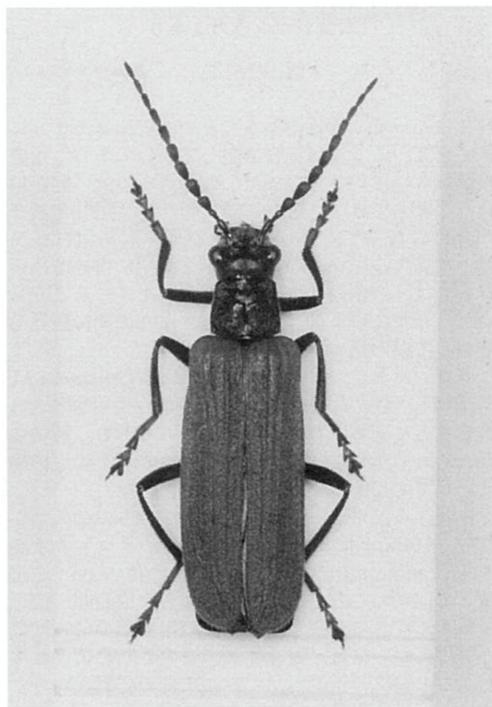
先生に初めてお目にかかったのは、私が東京農大に入学した年の鞘翅学会か甲虫談話会の席上であった。渡邊泰明先生が、まだ標本を集めたばかりの私を「彼はジョウカイをやりたいって言うてるんでよろしくお願いしますよ」と先生に紹介してくださいました。私が岡山の出身とわかると、佐藤先生は、「じゃあ、通り道だから帰省の行き帰りに名古屋へ寄りなさい」と言ってくださった。今、思い起こせば、当時それほど強い思い入れはなかったものの、採集でたまたまたくさん採れたジョウカイを研究テーマとして選んだことが、その後、長年にわたり佐藤先生にご指導いただくきっかけとなった。

以来、先生のお言葉にあまえ、何かとささいな用事を作っては大学の研究室へ、あるいはご自宅へお邪魔した。私のような全く駆け出しの学徒にも、ご所蔵の標本・文献等の研究資料を自由に利用することを許された。共著での投稿をお願いしたジョウカイの論文は13編に上るが、そのうち、先生が第1著者になられたのは初めての共著論文と先生の方から研究をお誘いいただいた2編の計3編のみで、2つ目の原稿についてご相談に伺った際に「これからは奥島&佐藤で行きましょう」と著者の順番を自ら修正された。それでいて、別刷り代金はいつも全額を負担された。

先生との共同研究で一番思い出に残っているのは、2001年、西表島でのベニジョウカイ *Lycocerus hiroshii* (写真) の発見である (SATO & OKUSHIMA, 2001, J. Jpn. syst. Ent., Matsuyama, 7: 117-119)。当時、私は上野俊一先生に激しくせかされて博士論文の作成に没頭する日々を送っていた。2月のある日の夜遅くに佐藤先生からお電話をいただいた。

「今、西表なんやけどもね、*Lycocerus* が採れたよ。真っ赤なやつ!」

それまで国内からは赤いジョウカイは知られていなかったもので、その価値は私にも理解できたし、ライトトラップを終えてすぐに現地から電話してこられた先生の意気込みにも表れていた。美しいものは早く記載してしまおうということになり、標本を受け取ってから数日のうちに記載論文を完成させた。ところが、それが上野先生の目に入って、「君は今こ



んなことをやっている場合じゃないだろう。佐藤君には、赤いジョウカイのことは奥島君には博士論文が終わるまで黙っておくように伝えたはずだよ」と少々あきれ気味のお電話をいただいた。一応、佐藤先生にご報告すると、いつものように明るく笑い飛ばされた。

私の博士号授与が決まったとき、結婚の挨拶も兼ねて妻と二人でお伺いしたら、寿美子夫人と一緒に名古屋名物の手羽先料理で祝福してくださいました。寿美子夫人が採集旅行にいつも同行されていると伺い、ちょっとうらやましく思った。決して長い時間ではなかったものの、最大の理解者である寿美子夫人との生活や旅行は先生にとっても幸せな時間であったに違いない。

大学退職後も、「まだまだいろいろ一緒にやりましょう」と言って下さっていたし、先生ご自身、標本箱を覗いては、「あれもこれもやらないかん」と意欲に満ちていらっやったのに、病魔に倒られたことは悔やまれる。私にとって、せめてもの救いは体調を崩される数か月前に印刷となった博士論文をお目にかけることができ、また、同年の本学会大会で先生を職場へご案内できたことである。佐藤先生に教わったことは私のこれからの人生に最大限に生かしたいと思うし、多くの方々に伝え引き継いでいきたい。それが私にできる唯一の先生へのご恩返しだろう。佐藤先生、ありがとうございました。

(倉敷市立自然史博物館)

## ムコジマトラカミキリ

新里達也

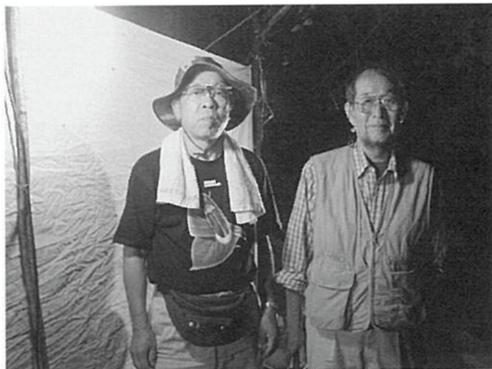
私にとって、佐藤正孝さんとの思い出はあまりに多すぎて、ここに何を書き記してよいのやら、正直わからないでいる。いまだに佐藤さんの死に向かい合うこともできず、原稿の締め切りを2週間も過ぎた今日になって、ようやく重い筆を取る気になった。錯綜する思い出のなか、いま鮮明に書き留められるのは、表題のムコジマトラカミキリのことくらいだろうか。以下は、私が佐藤さんと最期に意見を交わしていた話に基づいている。

ムコジマトラカミキリ *Chlorophorus kusamai* M. SATO は、小笠原諸島北部の聳島から採集された1雄をもとに記載されたトラカミキリである。種名の *kusamai* は故草間慶一博士に献名され、その追悼論文として1999年に公表された。

佐藤さんがカミキリの論文を書かれるのは久しぶりで、1982年に火山列島のミナミイオウトラカミキリ *C. minamiuwo* M. SATO et N. OHBAYASHI を記載して以来のことである。何事にも守備範囲の広い佐藤さんであるが、小笠原諸島の甲虫類の分布拡散と分化については、とくに関心をおもちのようだった。この論文の目的も、たんに新種の記載というよりは、父島・母島に分布の中心をもつクロトラカミキリ属 *Chlorophorus* の、小笠原諸島北部にある聳島における種分化の様相について、論議を起こすことが狙いであったものと推察される。このムコジマトラは、父島と母島およびその属島に広く分布するオガサワライキロトラカミキリ *C. kobayashii* KOMIYA の代替種として、同種との比較のもとに記載されたのであった。

このムコジマトラが記載された翌年に、私は神奈川県博の苜部治紀君と共著で、小笠原諸島のトラカミキリに関する論文を書いている。そのきっかけは、苜部君らの最近の調査で、聳島をはじめ、父島と母島の各属島から多くのトラカミキリ類の標本がもたらされ、そのなかにかくつかの新分布記録があること、今回追加個体が得られたムコジマトラの標本をもとに、その再記載を行うことになった。上記のようにムコジマトラはただ1雄個体によって記載命名されたのであるから、多数の標本をもとに、その種内変異を記載することの意義はけっして少ない。

聳島から苜部君らが採集したトラカミキリ類は、このムコジマトラのほかに、オガサワラトラカミキリ *C. boninensis* KANO が2個体含まれており、本種は同島からの新分布として、私たちの論文で記録されることとなった。ところが、このオガサワラトラはかなり変わった個体で、体は明灰褐色の微毛をもち、黒色紋はかなり縮小傾向にある。たとえば、上翅基部にあるO字紋は、退行してJ字条になっている。それはちょうど同所的に見られるムコジマト



ラに収斂した変異のように見えるし、同所的な両種は一見すると非常によく似た顔つきをしている。父島および母島のオガサワラトラといえば、基本的には体は赤みの強い微毛で覆われ、黒色紋はむしろ発達することで知られている。

当時私たちが確認できたのは2個体だけであるが、比較検討のためにさらに追加個体が得られるならば、この聳島のオガサワラトラの集団はおそらく種か亜種のレベルで、基準産地のものとは区別ができる根拠も見出しえるのではないかと。論文を書き上げる過程で、苜部君と私はそう相談し合っていたのである。

苜部君らによる小笠原の調査はその後にも継続され、多くの小属島からも、かなりの数のトラカミキリ類がもたらされた。聳島からは、さらにオガサワライカリモントラカミキリ *Xylotrechus ogasawarensis* MATSUSHITA が追加発見され、同島には現在3種のトラカミキリの分布が知られている。問題のオガサワラトラも、個体数は非常に少ないながらも、3個体が新たに追加され、その独特の変異は、ほぼ間違いなくこの聳島集団に固有のものであるとの確信をもてるに至った。

しかし、私たちのさらなる探索は、意外な展開と結末を見せることになる。ムコジマトラはオガサワラキイロトラの代置種であることを佐藤さんが原記載に書いていることは先に述べた。実はこの記述を盲信したばかりに、私たちは大きな勘違いをしていたことが判明したのである。

苧部君が、小笠原諸島のクロトラカミキリ属の雄交尾器を改めて検鏡しているうちに、佐藤さんの原記載の図は、比較したオガサワラキイロトラではなく、むしろオガサワラトラに非常に近いことに、気がついたのである。彼はもしやと思い、愛媛大学の大林延夫さんに連絡をとり、ムコジマトラのホロタイプを取り寄せた。その結果は、はたしてご想像のとおり。

私たちが新タクサとして記載しようとして準備していた種が真のムコジマトラであり、すでに再記載していたものが、未知の種であったのだ。これはもちろん、私たちの軽率な研究姿勢ゆえに招いた結果であることはいうまでもない。タイプ標本の調査さえしていれば、このような混乱を生じなかったのだ

### 佐藤正孝先生を偲んで

川島逸郎

佐藤正孝先生が逝去された日、最初の一報は岸本年郎さん（(財)自然研）からで、その件名を見た途端、思考が途切れてしまった記憶しかありません。先生のお名前は、当然ながら幼少より存じ上げました。「昆虫の世界」（保育社）は、子供向け図鑑に未掲載の虫ばかり、当時の私には「難解」に思われたものです。しかし後年、それを著された先生と接する好機を得、懇切なご指導まで頂くことは、夢想だにできないことでした。自然に親しみつつ徒に手探りのみを繰り返す、大学の昆虫学研究室入室まで「昆虫学」に触れることもほとんどなかった私の関心も、10台半ば過ぎからの「蜻蛉追い」の延長のまま。そればかりが思考の大半を占めつつホタルへも視線を向けた後、やはり先生のご指導を仰ぐことは不可欠との思いが強まり、名古屋へ先生をお訪ねしました。爾来、何かとご高配や諸資料を賜り、「私が頂いて良いものか？」と思える貴重な標本を恵り頂くことも度々でした。ある時、先生の研究室で標本や文献を調べながらの作業中、眼鏡を額に乗せ机の中を掻き回していた先生が、「おっ、これやこれ」と独言のように呟き、1本の管瓶を取り出されます。手渡されたその中に、白く伸びた芋虫が、液中でゆらりと倒れつつありました。それはヒゲボタル *Stenocladius* ♀成虫で、採集・飼育共に難儀な虫です。感動の余り無邪気に喜ぶ私に、先生曰く「あげますよ！」。私が怪訝な表情でも浮かべたか、先生は「柔らか過ぎが実は苦手で」と白状され、楽しげ？にニコリとされたお顔が今もありありと思ひ浮かびます。この日、多くの学生・卒業生の方々も在室され、

ある。ともあれこの新種は、ムコジマキイロトラカミキリ *C. masatakei* NISHITO et KARUBE という名前を付け、今年の5月に苧部君と共に発表された。

今年の6月初めのことである。名古屋のご自宅療養中の佐藤さんをお尋ねしたときに、私はここに記してきたようなことの、一部始終をお話したのだった。話の流れをご理解された佐藤さんは、ちょっと複雑な表情をされていたが、すぐに笑顔に戻り「名前を付けてくださってどうもありがとう」といい、とても喜んでくださった。

ムコジマキイロトラはその命名を急ぐ理由があったので、短報の形で公表したのである。日本産カミキリムシ図鑑の出版が迫っていて、その期日までに、新名を公表する必要があったからである。

しかし、はからずもこれが、生前の佐藤正孝さんに献名された最後の昆虫の名称となってしまった。

新種の命名がせて間に合ったことだけでも思いながら、虫が大好きだった先生へのご供養の言葉としたい。

(東京都国分寺市)

皆様の歓待に私は恐縮ばかりしていました。先生が「これが、ミヤコマドボタルを調べたMさんで…」と、先ほどお茶を入れたりされていた方を唐突にご紹介下さったのにも、驚き入り絶句?! したまま立ち尽くし、との情景も回想されます。固めの甲虫が(より)お好きな先生も、戸棚から標本箱を引き出される傍ら、興味津々、勝手に覗き見していた限り、甲虫以外の虫もしばしば混じっていたようでした。その度に私が「あ！」とか妙な合の手を入れるので、照れたような、片やとても嬉しそうに「いやいやこれは…」等とお返しが常、結局虫は何でもお好きなのですねと改めて思ったことです。先生のご論著の挿図作成を拜命した貴重な思い出としては、岸本君が中国で発見、先生と共に著で記載・発表された洞窟性ヒメドロムシ *Sinelmis* があります。外見上も余り機能的に見えないにせよ、粗造ながらも複眼は残っていましたが、つい地上の種の様を描写してしまったところ、先生の「もう一寸眼を…」といったご指示があり、慌てて修正を施しました。こうした際にも、いかに生身の人間らしいお人柄が偲ばれ、私は逆に嬉しさのような思いを抱いたものです。先生にとって印象深い種の一つであったのか、台湾の機関への標本寄贈に当たっての特別展に際し、ポスターをはじめ様々なグッズにも本図があらわれており、改めてお礼の書簡とともにこれら品々をご恵送下さいました。ご逝去のほんの一週間程前にも、標本貸与のご要望、今後のご研究の展望につき直々のご連絡があり、今見返すにつけ、先生の飽くなき情熱は、何ら衰えることなく保たれていたと確信いたします。最後に賜った先生書きかけのいくつかの原稿は、今となっては、私に後日を託された課題と思えてなりません。誠に不肖であったとは私自身否めませんが、いつか必ず完成させること

がご恩にお報いする一つの義務と、改めて心に期する次第です。そのお人柄に触れ、また色々ご指導下さった時間の短さがどうにも悔やまれてならず、いまだ居た堪れぬ心境に陥りますが、こうして筆を進めてゆくにつれ、思い出はそれなりに次々脳裏に甦って参ります。これらを綴ることは私にとって、

良き思い出を留め置きたいとの心情とは表裏の、誠に寂しく、かつ哀しい作業でしかありません。今はまだ、私自身の心中のみにそっと折り敷きつつ、先生のご冥福を深くお祈り申し上げます。

(神奈川県横須賀市)

### 佐藤先生の思い出

齊藤明子

佐藤先生とはこの十数年、あちこちと採集にご一緒させていただきました。国内だけではなく、ロシア、ベトナム、中国と、どれも楽しかった調査の様子が思い出されます。いつの調査でも、思い出されるのは長靴に吸虫管をくわえ、せかせかと採集されている先生の様子です。きっと、佐藤先生と採集に行かれた方は、どなたもがその姿を思い出されることでしょう。

調査にご一緒して、佐藤先生から学ばせていただいた大きなことのひとつは、「虫は、採れる時に採っておかなければならない」ということでしょうか。印象に残っているエピソードは、ベトナムの片田舎の町に泊まったときのことです。泊まった宿は田舎町に似合わない真っ白な建物で、宿のベランダでライトをつけて夜間採集をしました。この日は小さな虫がたくさん集まり、佐藤先生は最初のうちは吸虫管で虫を吸っていましたが、そのうち箒で、幕に付いた虫から床に落ちている虫まで、ベランダ中の虫を集め出しました。その後どうやってドクビンに入れたのかは記憶にないのですが、おそらく、ちり取りに入った物をすべて持ち帰られたのではないかと思います。持ち帰った後の膨大な作業のことを考えると、この採集法は躊躇してしましますが、もしこの時採らなかったら、その虫は二度と採集することができなかったにちがいません。

このように、佐藤先生と調査にご一緒して、先生の姿を拝見しているだけで、調査に出掛けたら自分の専門の分類群だけではなく何でも採れるときに採らなければならない、ということをお教えいただきました。資料を集める使命を持つ博物館に勤める私にとって、とても大切なことを与えていただいたと思います。

国内の採集でもいろいろな思い出があります。北海道では毎日、「午後の紅茶」をがぶがぶと飲んでらっしゃいましたね。あんなに甘い飲み物をたくさん飲んではいけませんね。それから利尻島へ行くのに間違えて礼文行きの船に乗ってしまい、礼文の港



写真 1995年5月9日北ベトナム Tam Duong の宿にて

でわざわざ待っていてくれた利尻行きの船に、大人の4人、大荷物を担いで走って船を乗り換えましたね。いつの調査の様子も、思い出すと佐藤先生の笑顔が見えます。先生、ありがとうございます。ご冥福をお祈りいたします。

(千葉県立中央博物館)

## 佐藤正孝先生を偲んで

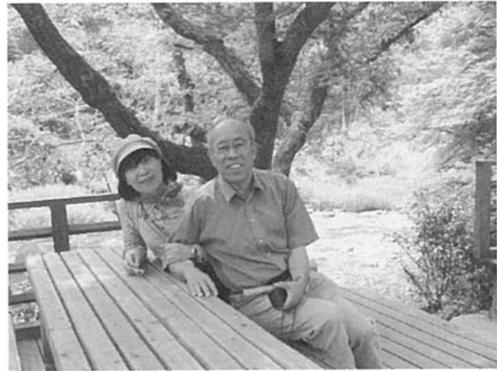
吉富博之

先生の葬儀に向かった日、名古屋到着が夜中になってしまい市内のビジネスホテルで1泊した。チェックインする際に部屋番号を見ると「641」。「縁起がいいですねえ」、佐藤先生ならそう言うだろう。

先生は、穏やかで春のような方だった。にこやかで楽しい人であった。頼みごとを断れない性格であった。本当に虫が好きで、虫屋の中の虫屋であった。天才肌ではなく、努力の人であった。出される論文数が多く、雑な一面もあったが、論文を出すのに費やす時間と努力は並大抵ではなかった。体を壊され入院するのに際し、自分の体がかなりキツイだろうにもかかわらず、気になっている昆虫に関する文献や書きかけの原稿を束にして病室に持ち込んだという。そんな性格が先生の寿命を短くされたのだったら残念で仕方ない。

先生は晩年、ご自身で「重要な箱」というものを作られていた。記載しなければならぬ新種のうち、どうしても自分が記載したいものや凄い発見のものを、印籠箱2つに整理されていた。その箱には分類群に関係なく標本が入れられていた。ゲンゴロウ、ガムシ、ヒメドロムシ、アカハネムシ、オオハナノミ……、いつも凄い虫で一杯であった。論文が作成されてその箱の一角が空くと、また別の虫が入ってきてしまうのである。お亡くなりになる前もその箱は虫で一杯であった。先生の無念さを考えると残念で仕方ない。

お亡くなりになる直前に手がけていた論文の1つに、ミクロネシアのイソジョウカイモドキ *Laius* 属の論文があった。体調を崩されてからも気にされ



ていた。それはお世話になった友人へ献名した種の記載論文だったが、それとともに未解明な東南アジアの *Laius* 属研究の一連の入り口として考えられていた。ほかにも作成途中の論文が多数あった。甲虫の多様性に酔い溺れていらっちゃった。

採集に行かれることも大変好きであった。採集に出ると寸暇を惜しんで様々な虫を採る。晩年は、体をきつそうにされることもあったが、採集に行かれると少年のように生き生きとされていた。

命をまっとうされた佐藤先生。そのバイタリティと壮絶な生き方は、後輩の眼にどのように映ったのであろうか。幸せな人生をまっとうされた私には思える。

極楽浄土の浄土浜は、白砂の浜が広がり、空と海はどこまでも澄んで青い。磯はあるだろうか？ 砂浜はどんな感じなのだろうか？ 先生の好きな海浜性のイソジョウカイモドキやハンミョウを天国でも追いかけておられることを心からお祈りする。

((株)環境指標生物)

## 佐藤先生と「図説 日本のゲンゴロウ」

森 正人

私と故北山昭氏が日本産のゲンゴロウ全種の整理を始めた1980年台後半は、佐藤正孝先生は日本の水生甲虫に関する指導的な立場にあり、各地からの情報や標本が先生のもとに多く集まっていました。当然、私も佐藤先生にいろいろと教わる事が多く、ゲンゴロウの図鑑を作るにあたって、最も頼りにしていた存在でした。一方で、佐藤先生と故中根猛彦氏との擱筆が昆虫誌上でも大きく表面化し、ゲンゴロウ類の学名や分類に関する両先生の意見の違いをわれわれとしてはどのように整理すれば良いのか、悩ましくそして大きい問題を抱えていました。

紆余曲折がありましたが、結局われわれは学名や分類に関しての相談を両先生方には一切せず、自分たちで納得できる表記を二人で考えることにしました。しかし、どうしても必要な文献や標本類の借用

は先生方をお願いするといった、今考えると大変身勝手な厚かましい行動をしていたこととなります。

「図説 日本のゲンゴロウ」の初版原稿ができあがった1992年の暮れに、私と北山氏は名古屋女子



写真 本邦初公開?のメクラゲンゴロウ生態写真

大の佐藤先生の部屋を訪問し、原稿ができた旨の報告とお礼を言いに行きました。正直、佐藤先生の考え方に対して大変失礼な部分もあったはずですが、思い切って掲載種のリストも見いただきました。佐藤先生はそのことについては一切触れず、「お二人で考えて決められたことが重要です」と大変喜んでいただき、大変ほっとしたのと同時に、先生の「懐の深さ」といったものを強く感じていました。その後、図鑑の出版記念の席にも出席していただき、席上でお祝いの挨拶もしていただきました。

佐藤先生との最初で最後の採集は、ある寒い冬の日の姫路市内にある公共施設の井戸端でした。もちろん目的は、井戸ポンプでの地下性ゲンゴロウです。何時間もかかって井戸の水を汲み上げ、やっと1頭のメクラゲンゴロウを得ることができました。

### 佐藤先生の思い出

高橋和弘

佐藤先生は、多方面の分野でご活躍されたが、私が専門とするジョウカイボン科においても、大きな足跡を残されている。日本のジョウカイボン分野の大黒柱でもあった先生を失ったということは、この分野で何でも相談できる人を失ったということでもあり、その影響は計り知れないものがある。

先生との思い出の中で、今でも鮮明に覚えているのは、1990年4月7日に初めて先生の研究室にお邪魔した時のことで、ちょうど年度初めの忙しい時期であったが、先生は会議が終わったばかりというのに快く対応していただき、希望した文献等は、助手の方がすぐにコピーしていただいた。その時訪ねた理由は、神奈川昆虫談話会においてジョウカイに関する発表が目前に迫っており、いくつか確認したいことがあったからである。それらの疑問は、その訪問でたちどころに解消し、その後の私の研究を進める上でも大きな一歩となった。この一例でもわかることは、先生の後進の研究者に対する優しさである。先生に一度でも接した方はよくご承知のとおり、

先生は本種の採集は初めてとのことで、まるで子どものように喜ばれたことをよく憶えています。この個体はもちろん先生が持ち帰られ、大学の机の引き出しの中でしばらく飼育され、そして時々取り出しては眺めていたそうです。そのときに先生が撮影されたメクラゲンゴロウの生態写真(本邦初公開とご自慢でした)を先生には無許可ですが皆さんに見ていただきたいと思います。

大変なお世話になりながら、何のお返しもできないままなのが残念でなりません。虫の師を持たない私にとって、佐藤先生は唯一師的存在でした。先生を失った空虚さは埋めようがありませんが、先生の懐の深さや子供のような純真さは決して忘れることはありません。心よりご冥福をお祈りします。

(兵庫県西宮市)

り、まだ、海の物とも山の物ともわからない私に対しても、一人前の研究者として扱っていただいた。文献のコピーや標本の貸し出しなど、数々のご便宜を図っていたことは、その後の私の研究のバックボーンとなり、先生の支援がなければ、私の研究はほとんど成立しなかったといっても過言でないほどである。

昨年の暮、まだ先生が元気であった頃、たまたまお会いした際に、沖縄の *Asiopodabrus* を調べているという話をしたところ、今年の2月になってたくさんの標本をお送りいただいた。その際にいただいたメールにこれから入院すると、さらっと書かれていた。それがあの大手術であったことを後で知り、そのような状況の中で体に負担をかけながら、標本をお送りいただくというご迷惑をおかけしたことを後で後悔したものである。手術後はびっくりするくらいの回復であるという状況を聞いていたし、メールなどもいただいていたので、安心していただけが、お目にかかる機会もないままの突然の訃報は、本当に残念としかいいようがない。今自分にできることは、お預かりしている標本を1日も早くまとめ、先生の墓前に報告するしかないと考えている。

(神奈川県平塚市)

## ○シギゾウムシ 2種の分布記録と寄主植物の推定

1. イチハシシギゾウムシ *Curculio ichihashii* MORIMOTO, 1962

本種は、三重県鈴鹿市産の1雌に基づき記載され、最近、鈴鹿市内で再発見されたこと(市橋, 官能, 私信)と、三重県以外では、和歌山県から記録があるのみの(的場, 1999)、極めて珍しいシギゾウムシの1種である。

最近、既知の分布域からは隔たった、広島県厳島産の本種標本を検査する機会があったので、分布上興味深いためここに記録しておく。また、分布を確認する目的もかね同島を訪れたところ、紅葉谷溪谷沿いの標高400~500m付近で、クロバイ *Symplocos prunifolia* などの花を訪れていた本種を数例観察したこともあわせて記録しておく。

2♂, 広島県厳島, 25. VI. 2003, 中山裕人採集: 9 exs., 4. V. 2005, 小島観察。

本種の寄主植物については、鈴鹿市長沢町の長瀬神社にて再発見された際、サカキ *Cleyera japonica* やアオキ *Aucuba japonica* などからまとまった個体が得られたとのことだが、寄主を確認するには至っていない。2005年5月21~22日、著者は、当地を訪れる機会があり、叩き網による林床付近の調査を行うとともに、フォギング法による林冠の調査を行った。その結果、林床付近の低木層の調査では、わずかに2個体の成虫が確認されたに過ぎなかったが、樹高15~20m近いイヌシデ *Carpinus tschonoskii* やタブノキ *Machilus thunbergii* の高木層とサカキの亜高木層で構成される林冠の調査では、計9頭の本種が採集された。

本種は、シギゾウムシ属 *Curculio* の中では小形で、一見、チビシギゾウムシ属 *Archarius* (= *Balanobius*) の仲間を思わせる体形を呈するが、系統的にはアイノシギゾウムシ *Curculio aino* (KONO) に近いと考えられる(森本, 1984)。本種と近縁なアイノシギゾウムシが、ハンノキなどカバノキ科を利用していることから、上記調査でイヌシデ、タブノキ、サカキのうち、同じカバノキ科であるイヌシデから本種が得られた可能性がある。今後、イヌシデを含むカバノキ科の調査が本種の寄主植物を探索する上で手がかりになると考えている。

2. シロテンシギゾウムシ *Curculio yoshieae* Notsu, 1978

本種は長崎市産の1雄に基づいて記載され、これまで福岡県宗像市城山および浮羽郡田主丸、長崎県大村市、佐賀県鹿島市、奈良県奈良公園から採集されているだけで(森本, 2001)、生態的知見等がまったく得られていない極めて珍しいシギゾウムシである。

最近、和歌山県古座川町の北海道大学研究林内で、フォギング法を用いたイチイガシ *Quercus gliva* の調査で本種成虫が得られたので、成虫の加害樹種あるいは寄主植物の可能性もありここに記録しておく。

1♂4♀, 和歌山県古座川町北海道大学研究林(N33°40', E135°40'), 3. V. 2006, 筆者採集(フォギング)。

周辺のツクバネガシ *Q. sessilifolia*, ウラジロガシ *Q. salicina*, ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* も同様に調査したが、本種はそれらのサンプル中には見られなかった。また、この時期、イチイガシ葉裏にはタマバチの虫えいが存在し、本種の発生時期も加味すると、ミヤマシギゾウムシ *C. koreanus* (HELLER, 1927) のようなえい食者の可能性もある。

イチイガシは、社寺林以外ではあまり見かけない樹種であること、樹高が高くなることなどがこれまで本種ゾウムシを見つけにくくしていた要因ではないかと推測している。今後、春先のイチイガシに注意することで、本種の生態解明につながる発見が得られる可能性が高い。

最後に、イチハシシギゾウムシを含む貴重なゾウムシ類のコレクションを寄贈頂いた九州大学比較社会文化研究院の中山裕人博士、鈴鹿市での調査にご協力いただいた生川展行氏、および官能健次氏ら三重昆虫談話会の方々、九州大学の平野聖氏、和歌山での調査に協力いただいた的場 績氏、土谷賢太郎氏、北海道大学和歌山研究林の野田真人林長はじめ職員の方々に厚くお礼申し上げる。なお、本調査は、科学研究費補助金(16770067)の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 的場 績, 1999. 和歌山県産ゾウムシ科目録. 和歌山県立自然博物館館報, (17): 29-51.  
 森本 桂, 1984. ゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑, IV (林匡夫, 森本 桂, 木元新作編著): 269-345. 保育社.  
 森本 桂, 2001. シロテンシギゾウムシ. 福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック 2001: 393.  
 (九州大学総合研究博物館, 小島弘昭)

## ○沖縄諸島渡名喜島の4月のカミキリ採集品

沖縄県渡名喜島は慶良間諸島座間味島の北西約20kmに位置する小さな島である。ここでのカミキリムシの記録状態を調べていないが、調査される機会はきわめて少ないだろうと思われるので、わずか4種ではあるが以下に報告しておきたい。採集データはすべて2006年4月21日、青木淳一採集(神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵)である。

ウスアヤカミキリ沖縄諸島亜種 *Bumetopia oscitans okinawana* HAYASHI 1頭。

アトモンチビカミキリ沖縄諸島亜種 *Sybra baculina omoro* HAYASHI 1頭。

アヤモンチビカミキリ沖縄諸島亜種 *Sybra ordinata lochooana* BREUNING 3頭。

ワモンサビカミキリ *Pterolophia (Hylobrotus) annulata* (CHEVROLAT) 1頭。

末尾ながら、発表を快諾された横浜国立大学名誉教授の青木淳一博士にお礼を申し上げる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

## オキナワエンマコガネ伊平屋島の記録

オキナワエンマコガネ *Onthophagus itoi* NOMURA は沖縄島と久米島に分布するが、筆者は伊平屋島で採集しているので報告する。

4♂♂, 6♀♀, 沖縄県島尻郡伊平屋島腰岳, 2. VII. 2003, 田中 稔採集。

腰岳から前原ダムに抜ける遊歩道にかけたさなぎ粉を入れたコップに落ちていた。



## 引用文献

河井信矢ほか, 2005, 日本産コガネムシ上科図説, 第1巻 食糞群, 昆虫文献六本脚。

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

## ○東京都のキノコムシダマシ類の採集記録

キノコムシダマシ類は山地の朽木やキノコに集まる甲虫類であるが採集例が少なく、東京都からの報告もほとんど見られないようである。

筆者は東京都から6種の本科甲虫を採集しているので記録しておきたい。

1. クロコキノコムシダマシ *Pisenus rufitarsis* (REITTER)

3頭, 青梅市御岳山, 6. VII. 1996; 2頭, 奥多摩町三頭山, 29. VII. 1995.

2. アカバコキノコムシダマシ *Pisenus insignis* (REITTER)

2頭, 八王子市高尾山, 18. VII. 2004; 2頭, 青梅市御岳山, 25. VI. 2005; 1頭, 檜原村大岳山, 3. VI. 1989; 1頭, 奥多摩町三頭山, 4. VII. 1992.

3. マダラキノコムシダマシ *Abstrulia japonica* (MIYATAKE)

4頭, 八王子市陣馬山, 19. IX. 2006; 3頭, 青梅市

御岳山, 19. X. 1980; 多数, 奥多摩町倉戸山, 25. IX. 2006.

4. ルリキノコムシダマシ *Tetratoma sakaguchii* NAKANE

4頭, 奥多摩町樺ノ木山, 25. IX. 2006.

5. キムネキノコムシダマシ *Tetratoma nobuchii* NAKANE

1頭, 檜原村生藤山, 15. V. 1982.

6. モンキナガクチキムシ *Penthe japana* MARSEUL

1頭, 八王子市高尾山, 29. VI. 2003; 2頭, 青梅市御岳山, 16. VII. 1994; 1頭, 同市鍋割山, 25. VI. 2005; 1頭, 檜原村大岳山, 3. VI. 1989; 1頭, 奥多摩町海沢, 25. VI. 2005; 2頭, 同町三頭山, 29. VII. 1995.

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

## ○西表島におけるヒラズゲンセイの記録

ヒラズゲンセイ *Cissites cephalotes* (OLIVIER, 1795) は本州(近畿以西)から琉球列島, 台湾, 東南アジアにかけて分布し, 幼虫がクマバチ属の巣に寄生することが知られている。琉球列島内での分布は徳之島, 沖縄本島, 石垣島から知られ(東, 2002), 西表島からの記録はないようである。筆者は, 最近同島で採集された本種を検査する機会を得たので報告しておきたい。

1♂, 西表島大原(竹富町南風見), 2. IV. 2006, 飯島真耶採集(筆者保管)。

朝方, 自宅庭先のチガヤ上に静止していたとのことである。これまで国内で知られている本種の発生時期(5~8月)と比べると早い記録となる。

また, 本種の八重山諸島での寄主の記録はないが, この地域に分布するアカアシセジロクマバチ *Xylocopa albinotum* MATSUMURA の巣に寄生する可能性が高い。末筆ながら貴重な標本を提供いただいた同島在中の飯島真耶さんにお礼申し上げる。

## 引用文献

東 清二監修, 2002. 琉球列島産昆虫目録. xxiv+570 pp. 沖縄生物学会。

(九州大学総合研究博物館, 小島弘昭)

## ○伊豆大島におけるオオクヒゲコメツキの記録

オオクヒゲコメツキ *Tetrigusu lewisi* CANDÈZE は, 北海道から九州, そして東南アジアに広く分布することが知られている大型の種である。伊豆諸島からは, これまでに神津島, 三宅島, 御蔵や大島から記録があったが, 大島からの記録はなかった。

筆者らは, 伊豆諸島大島において本種を得ることができたので, ここに記録しておきたい。

本種はよく灯火に集まるが, 採集した個体も道路脇にあった水銀灯に飛来したものである。

1♀, 伊豆諸島大島泉津, 17-18. VIII. 2006.

(東京都世田谷区, 鈴木 互;  
東京都多摩市, 小林邦彦)

## 仙人と佐多岬

三枝豊平

福井大学名誉教授、佐々治寛之氏は、今年（2006年）7月31日午後4時すぎに逝去された。享年71歳であった。鞘翅学会からの依頼により、半世紀に及ぶ彼との交流の一端をつづってみたい。

長崎東高の神童といわれた神谷寛之、後の佐々治寛之は大学に入ると仙人に変わって酒飲みだった。当時九州大学は教養課程が福岡市六本松の第一分校と久留米市小森野の第二分校に分かれていた。昭和30年に第二分校に入学した私は、その秋、両分校が統一されて、六本松に移ってから以降ずっと昆虫学教室で共に虫の研究を続けることになった。優しく親切な先輩だった。我尽で生意気な1年後輩の私をいつも鷹揚に扱ってくれた。今でも、学生時代に彼が私に話しかけてくれる時の面影や話ぶりが浮かんでくる。テントウムシに限らず他人が目立たないCucujuoideaなどに熱心だった。タマムシも好きで、それは主筆だった「筑紫の昆虫」などでは「多摩夢子」のペンネームに表れている。

私が3年の初夏に突然、鹿児島県の佐多岬に二人で採集に行くことになった。山川の駅で降りて、丸木舟に近いような渡りでトビウオの飛翔を楽しみながら大隈半島の大泊にわたった。田尻の集落について、知り合った学校の先生のお宅に泊めていただいた。

翌日、一人一人がなんとか通れるほどの細い山道を二人で岬へ向った。道は所々で崖のような危険な急斜面をとおっていた。今の観光地の佐多岬から想像できない“亜熱帯”の自然に感激しつつ、岬の灯台守の小屋まで、ホウロクイチゴの葉の上でコンドウシロミノガのミノムシや、モンクロキシタバを採集しながら進んだ。岬の手前には古ぼけた社が一つ原始林の中に建っていた。私は一人でここに泊まってアセチレンランプで夜間採集をすることにした。彼は再び同じ道を田尻の先生のお宅まで帰ることにして、明日朝ここで落ち合うことにした。

夜、原生林に囲まれた社の周囲では怪鳥の羽音が響き、モノノケの気配が漂う中を耐えて、朝を迎えた。朝飯にはコッペパンでもかじったのだろう、約束した時間まで周囲で採集した。時間がかなり過ぎても彼は現れない。少しばかり心配になった。しかし、昼になっても現れない。昆虫採集にきたのだから来ないはずはない。一本道である。これはたつきり夕方、崖のあの細い道から転落したに違いないと思った。心配とあせる気持ちで採集を中止し、彼を探しに田尻方面に山道に戻った。しばらく進むと、遠く向こうから人影が見える。叩き網など見えるので虫屋だ。ああ、無事だったんだと、安心もしたが、どうして昼過ぎになってしまったのかと思った。彼は、「すまん、すまん。夕べはあれから先生と明け方まで焼酎を飲んでいてすっかり酔っ払ってしまって、出発するのが遅くなってね」。

昆虫学教室には大概午後に見れた。これも大概酒



図 1. 右：神谷寛之、左：三枝豊平、九州大学農学部で1958年頃；2. 学部4年頃、福岡市郊外の山；3. 日本昆虫学会九州支部大会（1957年12月）の写真、前列左より二人目江崎梯三先生；4. 3の一部を拡大、本人中央。

のためだった。教室には今からすれば大変性能の悪い実体顕微鏡が数台あった。彼が教室に現れる時刻には早く来た者が使っていた。しかし、遅くまで頑張っていて、空いた顕微鏡で多くの優れた研究をさせていた。夕方、理学部食堂で夕食を済ませて、教室横でバトミントンをするのが常だった。もともと足がちょっと悪かった。それを差し引いてもお世辞にも運動神経がいいとは言えなかったが、良くがんばっ

ていた。雪道で転倒したのも、酒のなせる結果だったかもしれない。決して長い人生ではなかったが、テントウムシの総説、ナミテントウやヒメカメノコテントウの種の問題など多くの優れた研究を残していた。もっと長生きしてほしいが、これが仙人の生き方だった。感謝の気持ちを込めてご冥福を祈る。仙人いろいろありがとうさんでした。

(福岡市南区)

#### ○埼玉県におけるセスジダルマガムシの記録

*Ochthebius inermis* SHARP, 1884 セスジダルマガムシは吉富ら (2000) の概説によれば、セスジダルマガムシの仲間としては *O. hasegawai* ハセガワダルマガムシとともに比較的記録の多い種であるが、その生息地は局所的であるようだ。筆者らのうち岩田は埼玉県内の水生甲虫類を調査した際に、同県下から未記録であった本種を確認したので、生息環境等とともに報告する。

8 頭、埼玉県小鹿野町飯田、赤平川 (標高約 350 m)、28. V. 2006、岩田泰幸採集、筆者ら保管 (図)。

今回本種が得られたのは、県下でも水生生物相が豊かなことで知られる清流、赤平川支流の河川敷にできた小さな水溜りである。この水底の砂利を手で

かき混ぜた際に *Laccobius bedeli* シジミガムシ等とともに本種が浮き上がってきた。この採集状況から見て、この場所では水底の小石と小石の間に身を隠しながら生活しているものと推察する。また、同地ではハセガワダルマガムシも採集しているが、こちらは河川の流れの中に孤立した石上に見られ、個体数も極めて多く、石の隙間や割れ目などにかたまっている姿をごく簡単に観察することができた。採集中にこれら 2 種が同時に得られることはなかったことから、微環境の好みの違いにより棲み分けているものと判断する。

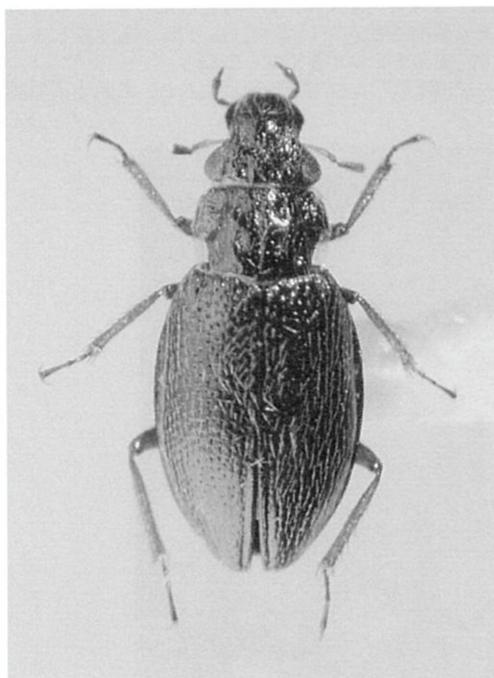
埼玉県のダルマガムシ類についてはこれまで 4 種記録されており、この科の種で県下から初めて報告された *Hydraena riparia* ホソダルマガムシは小鹿野町のこの 1 例 (大熊・黒澤, 1995) 以後は全く得られていない。その後 JACH & DIAZ (1999) は、吉富博之氏が飯能市から採集した個体を基に *Hydraena yoshitomii* ヨシトミダルマガムシを新種記載した。これらの情報を含め、豊田 (2000) が県下の記録を整理し、さらにハセガワダルマガムシと *O. nakanei* ナカネダルマガムシを県内各所の標本により追加した。本種はこれに続き県下 5 種目となる。近隣の都県ではこれらのほかに *O. japonicis* ホンシュウセスジダルマガムシや *O. satoi* コセスジダルマガムシが記録されており、今後埼玉県からも記録される可能性が高いと言える。

#### 引用文献

- JACH, M. A. & J. A. DIAZ, 1999. Description of two new species of *Hydraena* KUGELANN from Honshu, Japan, with a check list of the Japanese species (Coleoptera, Hydraenidae). *Jpn. J. syst. Ent.*, 5: 337-340.
- 大熊光治・黒澤與四郎, 1995. 小鹿野町自然環境調査報告書。小鹿野町の自然 (I), pp. 71-107.
- 豊田浩二, 2000. 埼玉県のダルマガムシ類について。寄せ蛾記, (94): 2835-2837.
- 吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之, 2000. 日本産セスジダルマガムシ属概説。甲虫ニュース, (130): 5-11.

(東京農業大学, 岩田泰幸)

(埼玉県嵐山町, 新井浩二)



## 小宮義璋先生の突然の他界

高桑正敏

ハムシ科甲虫の研究者である小宮義璋先生が亡くなられたのは2006年8月1日、それから2カ月以上も過ぎ、季節も移り変わってしまったというのに、私にはいまだにその実感が無い。長期の海外調査の多い方だったせいか、そのうち忘れた頃に電話がかかってくるような、そんな気にとらわれてしまう。8月26日の東京学生会館での「小宮先生を送る会」で、『小宮先生が亡くなられたなんて、私はとても信じられません。こうして、小宮先生の写真の前で、小宮先生と親しかった方々が集まっているのも、何かおかしな夢を見ているようです。』と述べたが、その気持ちのままなのである。

2005年の春に群馬大学医学部を定年退官され、『さあ、これからはサンデー毎日だ。毎日が虫三昧だよ、どうだいだろう！どこだって一緒に行っておけるよ。』と、心から嬉しそうな顔が忘れられない。じっさいその後、ラオスからタイ、沖縄、北海道へと長期の採集に出かけられ、2006年もスマトラ、タイ、奄美諸島へと精力的に採集してこられた。『採集できるうちに採集しておかなくっちゃ！』が信条だったし、『でもねえ、さすがにお金がなくなるね。仕方ないから大学の講師を引き受けたけれど、春から夏はダメだと言って秋からしてもらったんだ。』とあくまでも採集を優先されていた。

亡くなられたのは、そんなお話をされていた矢先であった。8月1日のその日の晩、むし社の猪又敏男氏から電話があった。『小宮先生が亡くなったって。ウソじゃないよ！木附君から電話するように頼まれたんだ。なんでも今日、一緒に行ってお心臓麻痺を起こしたらいい。』と。家内にその電話を告げたものの、とうてい信じられなくて2人そろって呆然としていた。お酒を飲んで、小宮先生を思い出しながら現実を理解しようとしたが、亡くなられたなんてどうしても受け入れられなかった。

小宮先生とはこの数年間、タイ各地の採集旅行で一緒してきた。スイーピングしてから道端に座り込み、吸虫管をくわえネットの中の甲虫を1つ残らず採集するのがいつものスタイルであった。ふだんは60cm口径の籐枠をつけた短い竿しか持っておられず、数メートルも上にハムシの食痕を見つけると、『ねえ、あの木をすくってみてよ。』と頼まれたものである。ツユクサ類は多種の小型トビハムシ類が寄主とするとのこと、『こればっかしは人にももらえないから、たくさん自分で採らないとね。』と、朝早くから丹念にツユクサ群落を見て行ってそれこそ数百頭も採集され、『こんなに採ると、後で標本にするのが大変だけど、でも採れちゃうんだよね。』と苦笑いをされていた。テントウムシに似た超大型トビハムシの寄主樹木を発見されたときは、これで本当にトビハムシなの？という問いかけに、成虫を



図1. ありし日の小宮義璋先生。道端に座り込み、吸虫管をくわえてネット内の甲虫を採集するのがいつものスタイル。ラオスにて、2005年5月22日。



図2. 運命の虫、トホシニセマルトビハムシ。箱根にて、2006年8月20日。

突っついてピョコッと短く跳ぶ姿を見せ、『ほら、トビハムシでしょ。体が重すぎて下手だけど。』と教えてくれたりもした。もちろん、美しい大型種もお好きで、モモトオオハムシ類を発見されては大変に喜ばれていた。

当然のことながら、ネクイハムシ類も大好きで、ちょうど20年前と一緒に「ネクイハムシ研究会」を創設したことがある。大阪の野尻湖昆虫グループが地道に調査研究された結果を「アトラス 日本のネクイハムシ」として集大成されたのに刺激を受け、関東でもがんばらなくてはいけない、というのがきっかけであった。小宮先生の情熱というか、巧みな話術に誘い込まれて久保田正秀氏と3人で立ち上げたのである。この結果として関東地方から新種アカガネネクイハムシの発見へとつながる。その研究会も4年後には休会状態となり、そのままに至っていたが、小宮先生が毎日サンデーになったので、そろそろ再開しようじゃないかと誘われていた

ときでもあった。

「ネクイハムシ研究会」の最大の狙いはキイロネクイハムシ再発見だったが、今に至るまでも幻のままであり、関係者間ではすでに絶滅してしまったと考えられている。ところが2004年になって北海道から同属の日本未記録種キタキイロネクイハムシが採集され(堀, 2006, 月刊むし, (422): 10-12), 2006年はそれをぜひ再発見しようと意気込まれ、私に採集許可を取るよう依頼された。その調査は8月8~9日にハムシ研究者の松沢春雄さんと北海道開拓記念館の堀さんで行われることになっていた。直前に調査の結果を知らずして急逝してしまったことになる。さぞかし心残りであったことであろう。

心残りはそればかりではなかった。運命の8月1日に奥多摩に行かれたのは、ヒメノキシノブというシダ植物から珍品トホシニセマルトビハムシが採集されたとの連絡を前日に受けてのことであり、無情にもその場所のすぐ手前まで行かれながら、採集は叶えられなかったからである。ところが、なんと信じられないことが起きた。私はそのすぐ後で、同僚の苅部治紀氏の協力もあって箱根から本種を発見し、寄主がヒメノキシノブであることを確認する偶然に恵まれたのである。小宮先生がこのような運命でなければ、私が本種を探すこともなかったはずである。そこに小宮先生のお導きがあったと考えざるを得ない(高桑・苅部, 2006, 月刊むし, (429): 17-18)。

ところで、思い出してみようとするのだが、小宮先生といつ頃からお付き合いをさせていただいてき

たのか、よくわからない。東京のご自宅へ伺った最初が1980年であり、このときにタイ北部で採集されたタイベニボシカミキリとともに、たくさんのオビハナノミ類の標本を頂戴した。当時は、オビハナノミ類の採集法は一般には知られていなかったから、その数の多さに仰天し、採集上手の先生に敬意を表して?『悪魔だ!』と言ったことがある。ところが、その言葉が妙に気に入られたらしい。その後も何かあると、笑いを抑えながら『ボクは悪魔だから』と言うのが口癖だったからである。たとえば、小宮先生はきわめて博識なうえに話術もすばらしく、ディベートするといつとも私が負かされてしまうので、仲間内では私の天敵として知られていた。ところがどういう風の吹き回しか、最近私が言い勝つ場面も出てきた。すると『どうせボクは悪魔だから!』とすねるのが常であった。そんな小宮先生にもう会えないのは、本当にさびしい。

思い起こしてみれば、小宮先生からは虫についてばかりでなく、ご専門の医学にかかわることから海外の果物や食文化など、いろいろな知識を授けていただいた。まったくお酒が飲めない方だったが、こちらが酔っ払っても嫌な顔をせず、一緒になって場を盛り上げてくださった。あまりに博識でありまじめな方だったので近寄りたがたい雰囲気は漂っていたが、年齢が10も離れてなかったことでもあり、ちょっと怖い大兄貴分といった感じでもあった。とても楽しく親しくお付き合いしてくださったことに心から感謝を申し上げ、ご冥福をお祈りいたしました。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

### 小宮義璋 先生との思い出

日下部良康

小宮先生が東大医学部脳研究施設におられた頃、私はここから最も離れた農学部在籍し、第二の学生時代を過ごしていました。農学部のある弥生キャンパスと本郷キャンパスの間には道路が走り、その上に歩道橋が架かっていました。誰が言い始めたか知りませんが、学生の間で「ドーバー海峡」と呼ばれていました。3時前後のティータイムになると、ときどき先生から内線電話でお茶のお誘いをいただき、この海峡を越えて先生の研究室にたびたびお邪魔させていただきました。研究室の壁にネクイハムシの写真が貼ってあり、「いいでしょ!」とニコニコされながらおっしゃっていたことを思い出します。カミキリと同じくらいハムシも大好きだったので、思う存分、気兼ねなく虫の話ができる楽しみなひと時で、私にとってこの頃のことが先生との一番の思い出です。

現在、私は毎年ミャンマーでの昆虫調査を行っています。ハムシは天候、場所に関係なく、種数、個体数の多い少ないは別にして、どこでも何かしら

は採集できます。ジャングルを移動中のとでもしんどい時でも先生の喜ばれる顔を思い出すと見つけたハムシを見て見ない振りはできず、こまめに採集し、先生に提供しておりました。「そのうち、ミャンマーにも行きたいから案内をしてね」ともおっしゃっていました。

私がむし社で働くようになってから、先生は「サンデー毎日」の生活を満喫しておられ、むし社にもちょこちょこ遊びに来られました。お昼少し前に来られ、編集部の中村裕之さんと昼食、そして食後のお茶までご馳走になり、楽しい虫の話をお聞かせいただきました。7月末に、むし社に来られたとき「来週、また来ますね、今年のミャンマーのハムシまとめておいてね…」と言って帰られました。まさか、それが先生とのお別れになってしまうなんて思いも考えもしていませんでした。今でも先生がニコニコされながら「やあ!」と言って、むし社に来られそうな気がしてなりません。私のような者にも先生は優しく接して下さいました。先生のニコニコされた笑顔を生涯、忘れることはないでしょう。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。そして、小宮先生、ありがとうございました。

((有)むし社)

## 小宮さんとの出会いと別れ

新里 達也

小宮義璋さんと初めてお会いしたのは、台湾埔里の東京旅社という虫屋御用達の安ホテルである。もうかれこれ30年も昔に遡る。当時、私は大学生であったが、授業をさぼって1年のうちの2~3カ月の期間を、台湾でカミキリムシの採集に明け暮れていた。小宮さんは、すでに東京大学医学部でお忙しくされていたはずであるが、時間のやりくりをしながら頻りに台湾に通っておられたようであった。私は小宮さんとたびたび埔里でお会いし、山にもよく一緒に出かけたものである。

私はいまカミキリムシが専門ということになっているが、20代の前半の一時期はハムシにだいのめり込んでいて、標本も少しばかり溜め込み、文献も集めていたことがある。当時、周囲には凄腕のカミキリ屋がたくさんいたから、私はたぶんいじけていたのだろう。そのために、人のあまりやらない虫に逃げ込もうとしていただけなのかもしれない。しかしそのきっかけは、小宮さんと過ごした台湾の日々があったのだと思う。私は5年くらいの間、せっせとハムシを集めていたが、結局はなにも研究らしきものを成し遂げず、その後、標本はすべて小宮さんに差し上げてしまった。もっともその代わりに、ちゃっかり台湾やニューギニアのカミキリムシの標本をいただいた。なかでも台湾の標本は、全コレクションを頂戴してしまっただけで、そのぶん責任を強く感じたのだろうか、私の迷いは一瞬にして消し飛んだのである。あれ以降、カミキリムシ以外には、脇目も振らずに、今日に至っている。

群馬大学に赴任されてからは、大学の公務がお忙しかったようで、甲虫関係の会合で小宮さんのお顔を拝見する機会はなかった。しかしこの3年くらいは、神楽坂の私の会社にたびたび来られるようになっていた。それは、当社に在職するハムシ仲間の滝沢春雄さんとハムシ談義をするためである。退官後の口癖であった“サンデー毎日”のおかげであろう。ハムシの話をするために、ご自宅の向丘から、上り下りのきつい坂を越えながら、歩いて来られることもたびたびあった。

小宮さんとは不思議な縁がある。そのような再会が契機となって、「ラオスと一緒に採集に行きましょう」という話になり、一昨年の晩秋に、故佐藤正孝さんのご夫妻とともに、ラオスの中部のラクサオに、10日ほどの短期間だったが、採集に同行させていただいた。東インドシナの晩秋はひどく乾燥していて、新芽に集まるハムシにはあまり良い時期ではない。当然ながら、採集成果はあまり芳しくなかったけれど、軽口の掛け合いと笑いの絶えない、すこぶる楽しい旅行であった。思えば小宮さんと採集に出かけたのは、台湾以来の四半世紀ぶりのことであった。



退官後の小宮さんは、ハムシの分類学的研究にも精力的に取り組まれていた。私がエリトラ誌の編集幹事をしていることで、論文の出版に関しても、しばしば相談に来られることが多かった。原稿を書き上げると、投稿前にはいらして、「おかしな所がないか読んでみてよ」といって草稿を置いていかれる。私にしてみれば大先生であるから、あまり多くを申し上げるのも恐縮なのだが、それでもいくつか疑問点を指摘すると、丁寧に修正を加えた改訂稿を2日と待たずにもってこられた。

今年の7月末のときも同じであった。小宮さんは2つの論文を仕上げ、いつものように私の所へ持参された。手持ちの機材では標本写真があまりきれいに撮れないということなので、論文に使う写真は私のほうで撮影することにした。また、雄交尾器の図をパソコンの描画ソフトで描かれていたのだが、描線がひどく乱れていた。ついでのこともあり、これも私が直しましょうと申し出た。

小宮さんが、来週初めはたぶん採集に行くので、週半ばには撮影用の標本を持参すると言われたので、帰り際に私はいつものような軽口でこう申し上げた。

「あまり採集ばかり行っていないで、ちゃんと日本のハムシを全部片づけてから、お墓には入ってくださいね」

数日後、小宮さんから論文の内容に関わるやや長文の返信メールがきたが、その最後のところにはこう書かれていた。

「先週お邪魔したときに、帰り際に貴兄に言われた言葉が、心に一番しみました」

そして、これが小宮さんと私の最後のやりとりとなった。その翌日、日原の稲村岩に出かけた小宮さんは、トホシニセマルトビハムシを探索中に急逝してしまったのである。私は、いまさらながら自分の無神経さに腹が立つやら悲しいやらで、やりきれない気持ちがいまも続いている。

小宮さんが託された2つの論文はそのまま遺稿となり、テキストは完全ながら、絵や写真は未完成のままに手元に残された。私は、滝沢さんと相談して、ご遺族にお願いして、コレクションのなかの標本探索をさせていただき、論文と照らし合わせながら、基準標本群ほか必要な標本写真の撮影を済ませた。雄交尾器の描画は10点弱あったが、これはすべて清書し直すほかはないと判断し、私自身の手で作描することにした。

私の勝手な思いこみにすぎないのかもしれないが、この遺稿には故人の魂が乗り移っているような気がしてならない。論文改稿の作業をしている間は、ずっと、故人の情念が私に伝わってくるようで、非常につらいものがあった。夜半に作業をしていると、隣に小宮さんが座っているような錯覚に襲われたこともある。だから、10月半ばによく入稿原稿を仕上げたときには、責任を果たした安堵感とともに、ようやく小宮さんにお別れを言えたという思

いであった。

この2つの遺稿は、リュウキュウクビボソハムシ属の沖永良部島からの1新種の記載および台湾の*Pseudoliprus*属と近縁群の再検討という内容のもので、この年末に、それぞれエリトラ誌と日本昆虫分類学会誌に掲載済みである。

小宮さんとは本当に不思議な縁である。出会いのときも別れのときも、私の心の真ん中にどすんと大きな置き土産を残していった。出会いのときは私の将来の研究目標であったことを後に気づかされたが、お別れのそれは何であったのか。飽くなき虫に対する情熱なのか。若手虫屋に開かれた寛容なまなざしであったのか。いや、それほど難しい話ではないのかもしれない。

実は、小宮さんからいただいた最後のメールは、このように締めくくられていたのである。

「虫屋は虫を採っているときが一番ハッピーです」  
(東京都国分寺市)

#### 誄詞あるいは愚痴 一 小宮義璋氏によせて一

滝沢 春雄

振り返れば長い年月のようにも思えるが、甲虫談話会が発足した60年代の末に上野の科学博物館でお会いしたのが最初だったように思う。何か新島のハムシの話をつったような覚えはあるが、確かではない。80年代からはインドの標本をお借りしたりで、数年に一度くらいはお会いしたように思う。野外では00年にオゼタデハムシ類を採りに新潟の八荷峠に出かけたのが唯一の採集行であった。あれやこれやで、この30年に10回くらいはお会いしたであろうか。

この淡い付き合いが一変したのは、貴方も私も東京に戻ったこの2年ばかりのことであった。互いに標本の遣り取りが増え、ついには私が木曜サロンにひきだされ、月に2,3回は会うようになり、奄美大島あるいは西ジャワと二人で旅行する羽目になっていた。

娘にいわせれば「何か怪しげなお宅のあつまり」である木曜サロンではよく話をした。時に木附氏を交えて、三浦半島でとれた正体不明のヒゲナガハムシとか、遠軽のスミイロアラメオオハムシとか、タイのカタビロハムシとか、ともかく、ハムシの話が楽しくてならない。この二年あまりを寸刻を惜しむように採集に明け暮れたのは何故だろうか。大学では入試の責任者でもあり、採集にもでられず、虫を眺める暇もなかったとでもいうのでしょうか。昔、あなたが外国をふらふらと採集していた頃に、何を

していると、あれほどの自由が利くのかと不思議で、貴方の業績を検索して眺めたこともあったのを知らないでしょう。ともかく、人並み以上に虫を楽しんできて、その上にこの溢れるような2年間。

木附氏、南氏、富岡氏、井上氏、磯野氏それに稲泉氏と、関東地方のハムシ屋をあつめてのサロン乗っ取り計画、ホームページを立ち上げて「日本のハムシ」以降の追加種を解説すること、月刊の昆虫誌に面白げなハムシの記事を途切れないように載せること、最初の企画は貴方の「琉球のヒラタカメノコハムシ属」だったでしょう。さらに人の尻を叩いてハムシの報文をかかせること、もちろん、自分の材料を論文に処理していくことも、それもこれも、安心して若手に後を引き継ぐことが狙いでしたよね。

離島狂いの果てに琉球のノミハムシの検討、オゼタデハムシ群の検討、東南アジアのリュウキュウクビボソトビハムシ属の検討、懸案だったタイのカタビロハムシの検討と山のようにプランはあったでしょう。採集は面白いし、未知の問題を解決するのも楽しい。しかし、判った結果を論文にするのはただの作業で面白くもない。そんな暇があれば、体が動くうちは採集をしていたかったというのですか。

馬鹿をいうなよ。この2年間を採集に明け暮れて、するはずだった仕事をみんなほうりだして逝ってしまうとは、貴方がいなくてはサロンも時に退屈だ。

(埼玉県蓮田市)

## 小宮先生を偲ぶ

大桃 定洋

23年も以前に、自宅近く(阿見町実穀)で採集した1頭のハムシを小宮義璋先生に同定して頂いたことがあった。スゲハムシであったが同時に、スゲハムシを含むネクイハムシ類の表日本(東海~東北地方の太平洋側)からの記録はほとんどない、とのコメントを頂いた。すなわち、『ネクイハムシ類の分布空白域』とのことであり、このコメントが今日の飛躍的に発展したネクイハムシ研究の原点であった。つまり、小宮先生は東京を中心とする東日本における『ネクイハムシ熱』を流行させた張本人であった。その翌年1984年の6月上旬、筆者は筑波山の湿地でスゲハムシ以外に2種のネクイハムシを採集し、これらは小宮先生によってツヤネクイおよびオオネクイ(ミズクサネクイ)と同定された。しかも、オオネクイは原亜種や越後亜種(subsp. *babai*)とは明確に区別しうる特異な個体群であるとのコメントも頂いた。このオオネクイの発見に

## 小宮義璋先生との思い出

南 雅之

「前略 お手紙拝見いたしました。お元気の御様子で何よりです。多くのムシヤさんが羽化に失敗してしまう時期をどうやらのりこえた御様子で目出度いばかりです。」就職、結婚などでムシヤの世界から離れていく方がいるなかで、社会人6年目の私がハムシに関するお願いの手紙をお送りしたところ、このような書き出しで始まるお手紙をいただきました。まったく虫とは縁のない仕事を選びながら今でもハムシ屋を続けているのは、小宮先生からこのような励ましのお言葉をいただいたからかもしれません。

小宮義璋先生とお話をさせていただくようになったのは、1984年私が東京農業大学へ入学すると同時に昆虫学研究室に入室し、甲虫談話会の例会に参加するようになった頃だったと思います。その翌年ネクイハムシ研究会が発足、1985年11月に神奈川県立博物館(その当時自然史部門も横浜にあった)で発足会が開催され、小宮先生が“日本のネクイハムシ類の問題点について”という講演をしてくださいました。それまで数種類しか採集したことのない私にとっては知らなかったことばかりで、興奮しながら聞かせていただきました。先生はハムシ科甲虫のなかでもネクイハムシには特にご関心を持っておられ、その後の研究でアカガネネクイハムシ *Donacia hirtihumeralis*、セラネクイハムシ *Donacia akiyamai* を記載されています。

群馬大学を退官された2004年春以降は小宮先生に誘っていただき、関東周辺の採集に何度かご一緒

刺激され、2週間後の6月17日には小宮先生を茨城県北部の花園山地・亀谷地湿原へ案内し、何とクロガネネクイやヒラタネクイを含む5種のネクイハムシの棲息を確認してしまいました。この結果は早速に「月刊むし168号」に報告され、関東地方におけるネクイハムシ研究の幕開けとなった。

このネクイハムシの話は多くのムシの話の一例にすぎないが、たった1頭の普通種に関する情報が如何に重要な情熱を持って丁寧に説明され、それが大きく展開するように指導された小宮先生の達観した姿勢には感服させられ、少しでも見習うように努力している。そして、ムシの話の合間合間に醸し出される人生観には小宮先生の資性もさることながら、教示されることが多かった。

最近の5~6年は毎年、気心の知れた仲間たちと1週間程のタイ国への採集旅行を愉しんできたがそれも今年(2006年)で終わってしまった。今は旅行の間の愉しかった会話や貴重なムシに関するコメントなどを思い出している。

(茨城県稲敷郡)

させていただきました。鬼怒河川敷でヨツボシアカツハムシ *Coptocephala orientalis* を、富士山の林道でツマキクロツハムシ *Cryptocephalus difformis* を採集したときのことは今でも鮮明に覚えています。東京都あきるの市にホソネクイハムシ *Donacia vulgaris* を採りに行く際もお供させていただき、月刊むしに短報として連名で書かせていただいたのは昨年(2005年)のことでした。

小宮先生の採集法は、ネットの底が一杯になるまでスイーピングをされ、腰を下ろしてゆっくりとネットの中身を覗きながら吸虫管で吸うスタイルで、「最近目が遠くなって、タトウに並べてはじめて珍しい種類を採集したことに気が付くことがあるんだよ」と吸虫管でハムシを吸いながらそうお話しされたお姿を思い出します。また、そうお話しされている先生の脇を子供が興味深そうに通ると、笑顔で声をかけておられました。ほんとうにやさしいお気持ちを持った先生だなと思うとともに、教育者としての一面を見せていただいたような気がします。

小宮先生は自分で実際に採集することをとても大切にされる方でした。それゆえ食草も含めた生態に関する知識をたくさんお持ちで、興味深いお話をいろいろ聞かせていただきました。退官後は、体が元氣なうちにとおっしゃられ、北海道・沖縄・ラオスなど国内外へ精力的に行かれていました。亡くなる前の年(2005年)には対馬へ採集に行かれ、自家用車で島内中を巡り、記録の少ないツシマヘリビロトゲトゲ(トゲハムシ) *Platypria melli* を多数見つけられ、食草も確認してこられました。「林道沿いに生えている1本の木だけに付いていて、飛翔している姿はとてもハムシには思えないよ」と帰京後のお電話でお聞かせいただいたときは、今すぐにも

対馬に行きたい気持ちになったのを覚えています。

年に数回しか採集に行かないできの悪いハムシ屋ですが、これからもっともっとハムシの話を先生とさせていただけると思っていただけに、小宮先生の計報は私にとって大変ショックなことでした。いま

までご指導いただきましたことに感謝し、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、先生が目指しておられた日本のハムシ相の解明にハムシ屋のひとりとして少しでも力になればと思っております。

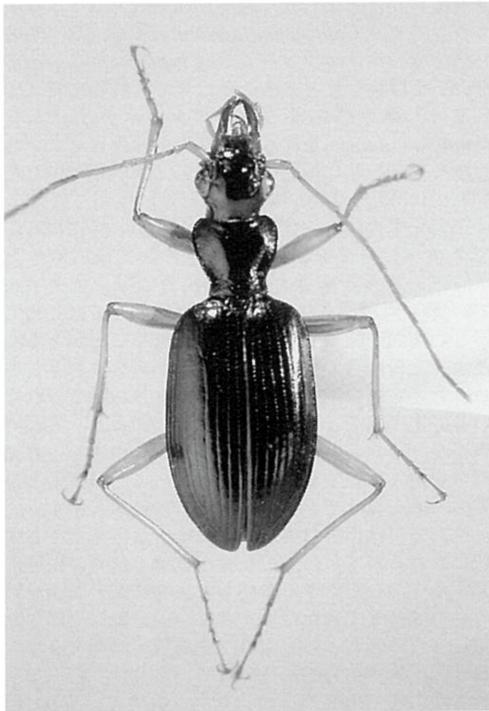
(武蔵野市)

### ○キバナガヒラタゴミムシの採集例

*Onycholabis sinensis nakanei* キバナガヒラタゴミムシは、中国四川省の個体により BATES (1873) が記載した *Onycholabis sinensis* の日本亜種として、KASAHARA (1986) により丹沢産等の個体を基に記載された。これまで知られる本亜種の産地は決して多いものではなく、神奈川県では県のレッドデータブックにおいて絶滅危惧のランクに指定されている。

静岡県内の河川沿いにおいて、夜間に街灯まわりをしていたときに採集したヒラタゴミムシ類の中に、本種が含まれていたが、知見の少ない種であるのでここに記録しておくことにする。

1♂, 1997. V. 31, 静岡県静岡市金山, 筆者採集保管 (図)。



採集時には外見が一見 *Platynus leucopus* タンゴヒラタゴミムシに似ていることから特に気にもしていなかったのだが、最近標本を整理していた際に気がついたものである。金山の“道の駅”に向かう手前で安倍川を渡る橋の袂において採集している。

### 引用文献

- BATE, H. W., 1873. Descriptions of new genera and species of geodephagous Coleoptera, from China. *Trans. ent. Soc. Lond.*, Part II, 1873: 323-334.
- KASAHARA, S., 1989. Occurrence of *Onycholabis* (Coleoptera, Carabidae) in Japan. *Spec. Bull. Jpn. Soc. Coleopterol.*, Tokyo, (2): 75-80.

(埼玉県嵐山町, 新井浩二)

### ○岡山県から採集された *Micropeplus hiromasai* Y. WATANABE et Y. SHIBATA

セスジチビハネカクシ属 (*Micropeplus*) は本誌45号においてそれまでの日本産既知種6種の概説がなされ (渡辺, 1979), その後2新種 (WATANABE, 1990; WATANABE, 2004) が追加されて現在日本産本属は8種が知られている。

2005年, 岡山県において FIT による甲虫調査を行ったところ, 岡山県未記録の *M. hiromasai* を採集することができたので報告する。

1♀, 岡山県高梁市備中町平川金平国有林, 27-V~4-VI-2005, 筆者採集。

1♂, 岡山県高梁市備中町平川金平国有林, 4~8-VI-2005, 筆者採集。

1♀, 岡山県奈義町那岐山, 1~8-VI-2005, 筆者採集。

本種は九州と北海道から知られていたが (渡辺, 1979), 近年本州の島根県隠岐 (WATANABE and SHIMADA, 2005) と長野県大町市針ノ木谷 (降旒, 2005) からも採集されている。

末筆ながら, 同定の労をとっていただくとともに文献をご恵送いただいた渡辺泰明博士に厚く御礼申し上げます。なお, 標本は渡辺博士が保管している。

### 引用文献

- 降旒剛寛, 2005. 長野県のハネカクシ資料若干 (II). まつむし, (94): 16-19.
- 渡辺泰明, 1979. チビハネカクシ亜科 (Micropeplinae) 概説. 甲虫ニュース, (45): 1-8.
- WATANABE, Y., 1990. A new *Micropeplus* (Coleoptera, Staphylinidae) from the Island of Oki, west Japan. *Proc. Jpn. Soc. Syst. Zool.*, (42): 37-41.
- WATANABE, Y., 2004. A remarkable new species of the genus *Micropeplus* (Coleoptera, Staphylinidae) from Hokkaido, northern Japan. *Elytra*, 32: 79-84.
- WATANABE, Y. and Shimada, T., 2005. New record of *Micropeplus hiromasai* (Coleoptera, Staphylinidae) from the Island of Dogo of the Oki Islands, Japan. *Elytra*, 33: 602.

(岡山県岡山市, 鈴木 茂)

○ホソアシチビシテムシの分布、生息場所、食性について  
はじめに

ホソアシチビシテムシ *Cholevodes tenuitarsis* PORTEVIN, 1928 は、日本特産の1属1種のチビシテムシである(写真1)。近年の知見によれば、生息環境がチビシテムシとしては特殊で、生態にも不明な点が多いためか採集例が少ない。したがって、その分布状態についても、十分解明されているとは言えない。

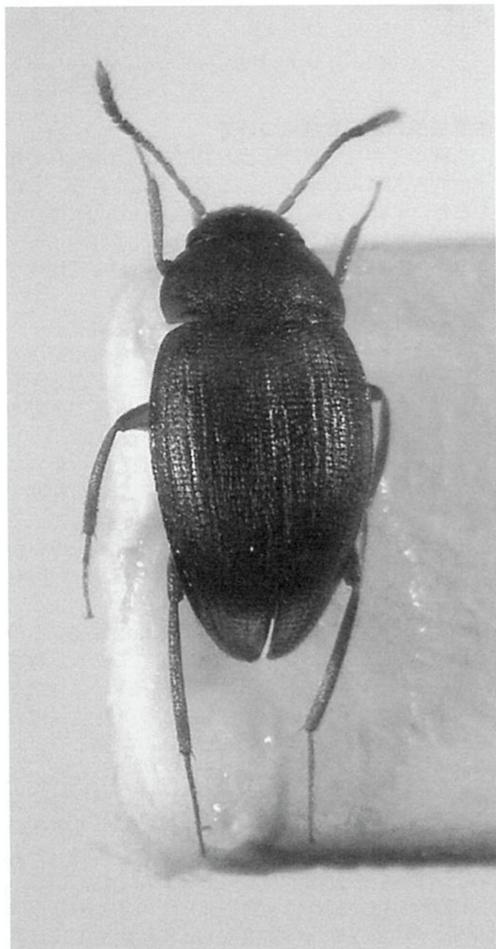


写真1. ホソアシチビシテムシ。

筆者らは、本種について数例の分布知見を得ることができ、また、平野幸彦氏より未発表の採集データを御教示戴いた。そこで、従来の分布知見と併せ産地を総覧し、同時に生息場所と食性について考察した。

本稿をまとめるにあたり、平野幸彦氏(小田原市)、西川正明氏(海老名市)には有益なご助言を戴

き、文献入手に便宜を図っていただいた。林 靖彦氏(川西市)には同定の労を賜った。また、田中馨氏(宇部市)、渡辺昭彦氏(倉敷市)には貴重な標本を恵んでいただいた。上記の方々に、厚く御礼申し上げます。

確認された生息地

- (1) 東京都高尾山: E. GALLOIS が採集した2♀♀に基づいて PORTEVIN (1928) により新属新種として記載された。
- (2) 神奈川県清川村丹沢山堂平, 1,100 m: (平野, 1993); (NISHIKAWA, 1994).  
ブナの樹皮下及び樹洞内から採集され、本種の特異な生息場所が明らかとなった。
- (3) 神奈川県津久井町大室山: (平野, 1998).
- (4) 神奈川県箱根町大涌谷: (平野, 1996); many exs., 5. VIII. 2000, 平野幸彦採集。
- (5) 神奈川県西丹沢三国峠: 12 exs., 14. IX. 2003, 平野幸彦採集; 神奈川県西丹沢三国山: many exs., 14. IX. 2003, 平野幸彦採集。
- (6) 群馬県沼田市玉原: 1 ex., 12. IX. 2002, 平野幸彦採集。
- (7) 山梨県富士山青木ヶ原: 1 ex., 10. VIII. 1997, 露木繁雄採集(平野保管)。
- (8) 山梨県甲府市大菩薩嶺上日川峠, 1,550 m: 1♀, 4. VIII. 2006, 渡辺昭彦(藤谷保管).  
ブナの樹洞より採集。樹洞内は少し湿っている程度、同時にオサシテムシ *Pelatinus striatipennis* 2 exs. を採集した。
- (9) 三重県一志郡美杉村平倉(現・津市), 800 m: 4 exs., 10. VI. 1995, 秋田勝己採集(林靖彦同定).  
ヒメシャラ生木の根際に開口した樹洞底に、水分が多く泥状になった腐植物が堆積しており、それを掻き出したところ、本種が見出された。
- (10) 奈良県上北山村大台ヶ原, 1,500 m: 1♀, 15. VIII. 1995, 秋田勝己採集(藤谷保管).  
採集状況は詳らかでないが、当日はヒゲトハナカミキリを採集するため、広葉樹樹洞内部を探していた。この個体も樹洞内部から採集した可能性が高い。
- (11) 岡山県西粟倉村若杉峠, 1,100 m: (山地, 2006).  
採集状況は詳らかでないが採集者の記憶からブナの立木樹皮下から採集された可能性が高い。
- (12) 岡山県真庭市蒜山下徳山, 750 m: 4♂♂, 8♀♀, 30. VII. 2006, 藤谷美文採集.  
大山蒜山スカイライン沿いのブナ・ミズナラ林内。生息が確認できたブナの樹洞(写真2)は、上部から雨水がしみこみ、洞内が常にかかなり湿っている状態であった(写真3)。同時に多数のオサシテムシやキクイサビゾウムシの一種 *Dexipeus* sp. が採集された。生息地周辺にある比較的乾燥している樹洞からは、本種を見いだすことはできなかった。
- (13) 山口県錦町右谷山(現・岩国市), 600~



写真2. 生息の確認できたブナの樹洞。



写真3. 樹洞内部。

1,000 m: (藤谷・田中, 2006).

採集状況は詳らかでないが、採集者の記憶から樹皮下より採集された可能性が高い。

(14) 宮崎県霧島山塊御池付近, 400 m: (高井, 1984).

記載以来半世紀ぶりに再発見された記録である。九州では唯一の記録と思われる。他の生息地に比べ採集された標高がかなり低いのは興味深い。

確認された生息地については図1に示した。現在知られている本種の生息地は群馬県を北限とする本州及び九州の一部であるが、本種の生息場所を考慮すれば、より広範囲に分布しているものと思われる。



図1. ホソアシチビシテムシの分布

#### 生息場所および食性について

本種の主要な生息場所は、温帯落葉広葉樹林の生木樹洞内部および樹皮下であると考えられる。このことは、すでに平野(1993)とNISHIKAWA(1994)が指摘している。通常は、広葉樹のそれを好むようであるが、今回平野氏より針葉樹生木の湿った樹皮下からも見出された旨ご教示いただいた。

本種が生息する樹洞内部は、極めて湿潤であったし、樹皮下からの採集例の多くも湿潤な腐朽部が表面に露出した部分からである。以上のことから判断すれば、本種は樹木の湿潤な腐朽部に好んで生息する種である。

チビシテムシ亜科甲虫には、小型哺乳類の巣穴に生息する種が知られているが、我々の経験の範囲では、本種が生息する樹洞には哺乳類が利用している痕跡は無かった。したがってNISHIKAWA(1994)が自説を訂正したように、本種は腐朽木棲と思われる。

多くのチビシテムシは陸生貝類や節足動物などの死骸を主な食物としていると考えられている。藤谷の観察では、本種が多く生息する樹洞内にはカマドウマやヤスデなどの多くの節足動物が生息しており、本種はそれらの生物の死骸を主な食物として、樹洞内に生息している可能性があると思われた。しかし、秋田の観察では、そのような節足動物は発見されていないことから、本種の食性は、他の多くの種と同様であるかは明確でない。一方、チビシテムシには腐植物を食物としている種が知られている。生木樹幹の細い割れ目(腐朽部)での多くの発見例(平野, 未発表)があることから、腐植食あるいは狭義のタマキノコムシ科甲虫と同様に、食菌性の可能性も考えられる。

広葉樹樹洞内部や生木の割れ目枯死部と言え、ヒラヤマコブハナカミキリ、ヒゲブトハナカミキリ、ベニバハナカミキリ、オニホソコバナカミキリ、ムネアカツヤケシコメツキ、クワイロカッコウムシ、クロホシクチキムシ、オオチャイロハナムグリ、ミヤマオオハナムグリ、クチキマグソコガネなど比較的珍しいとされる甲虫類が見出されることが多

い。読者諸兄もこれらの甲虫を採集中に本種を見出すことができたなら、生態的知見や分布記録を報告して欲しい。

引用文献

藤谷美文・田中馨, 2006. 山口県のチビシテムシ目録. 山口県の自然, (66): 39-44.  
 平野幸彦, 1993. ホソアシチビシテムシを倒木の樹皮下より採集. 月刊むし, (274): 16.  
 ———, 1996. 箱根にもいたホソアシチビシテムシ. 神奈川虫報, (116): 10.  
 ———, 1998. 白石沢, 大室山, 加入道山の昆虫類調査報告書. 神奈川虫報, (123): 1-13.  
 ———, 2004. コウチュウ目 Coleoptera, 神奈川県昆虫誌, pp. 335-835. 神奈川昆虫談話会, 小田原.

JEANNEL, R., 1936. Monographie des Catopidae (Insectes Coléoptères). *Mém. Mus. nat. Hist., Paris*, (n.s.), 1: 1-433.  
 NISHIKAWA, M., 1994. Rediscovery of *Cholevodes tenuitarsis* PORTEVIN (Coleoptera, Cholevidae) from Honshu, Japan. *Elytra, Tokyo*, 22: 249-253.  
 西川正明, 1997. シテムシ類とコガネムシ上科. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, 丹沢山地動植物目録. pp. 206-214. 神奈川県.  
 高井 泰, 1984. ホソアシチビシテムシの九州霧島からの記録. 昆虫と自然, 19(6) 35.  
 山地 治, 2006. 岡山県から採集した甲虫類の記録. すずむし, (141): 19-20.

(岡山県岡山市, 藤谷美文)  
 (三重県津市, 秋田勝己)

◇2006年度採集例会報告◇

2006年度日本鞘翅学会採集例会は7月15日から16日にかけて、八ヶ岳の稲子湯において行われた。参加者は両学会合わせて27名であった。日本甲虫学会との合同開催は1998年以来9年間継続しており、このまま続けば2007年には10年間連続となる。

梅雨のシーズンの真最中であつたため、最初の日は好天に恵まれたが、2日目は残念ながら雨天であつた。

採集ポイントは稲子湯周辺から白駒池近辺まで広範囲に及び、かつ標高が高いのでかなり山地性の種類も期待できる環境である。

“稲子湯はたいしたものとはとれない”という水野さんの懇親会での挨拶にもかかわらず、甲虫類はかなりの成果であつた。具体的にはスキー場で小宮義璋氏が採集されたセメノフツツハムシ、上坂幹夫氏のヨツモンナガクチキ（保育社の図鑑での名称）など従来、全国的に記録が少ない種が今回に採集された。その外、私自身も見つこともないムネスジダングラコメツキの一種、アカモンナガクチキ、山地性のゾウムシやナガゴミムシを相当に採集することができた。

ノリウツギの花の時期には少し早すぎたが、稲子湯の下流にハツニレの高木があり、シラホシクスイカミキリ、ヒゲナガシラホシカミキリ、ハンノアオカミキリが採集され、カミキリムシも一応は楽しめた。

小宮義璋さんが雨の中で玄関の石に躓かれ、転倒されて額を縫われるというアクシデントがあり、真夜中に佐久総合病院の分院から本院へとはしごをすることとなった。この結果、夜の病院の待合室で小宮さんと二人きりでいろいろとお話をさせていただく機会に恵まれたことになり、医師としての小宮さ



んの考え方をお聞きすることができた。その二週間後に小宮さんが奥多摩で急逝されたことを考えると、私にとってもまた参加者全員にとっても心に残る採集会であつたといえる。

また機会があれば稲子湯の採集例会を企画したいと考えている。

(横浜市青葉区, 大木 裕)

## 九州山地で採集されていたコットンヒメアメイロカミキリ

新里達也・荒巻健二

コットンヒメアメイロカミキリ *Longipalpus cottoni* DE KEYZER et NIISSATO (和名新称) は、タイ北部チェンマイ県を基準産地として、1980年代の当時、チェンマイで標本商を営んでいた Adam COTTON 氏に献名されたアメイロカミキリの一形態である。本種は、タイ北部では1980年代前半に十数個体ほどが採集されており、少なくとも当時はそれほど珍しいカミキリムシではなかったようで、新里も記載に際して用いた標本以外にも、日本人の採集家による複数個体を追加確認している。

このインドシナの種が、新種記載に先立つ1986年に、荒巻によって九州山地ですでに採集されていた事実が、このたび判明した。この標本は、荒巻がアメイロカミキリ族の不明種と認識しつつも未解決のまま長年私蔵しており、最近になって新里のもとに同定確認のために委ねられたものである。新里のもとに届いた標本はただちにタイ北部のコットンヒメアメイロカミキリと同一種であることが確認されたが、その予想外の発見にむしる物議を醸すことになった。すなわち、インドシナと九州では地理的に遠く隔てられているばかりか生物地理学的にも近縁な要素は少なく、本種の九州における自然分布を肯定する根拠が非常に乏しい、というのがその最大の理由である。しかし、採集地点は人為環境から隔離された九州山地の自然林であること、今回の検視結果からタイ北部産との若干の形態差が認められるなど、海外からの移入個体の野外発見として片づけてしまうわけにもいかない。まして本種が再び九州山地で発見される可能性もまったく否定できるものでもない。そこで本報告では、荒巻の採集標本に基づき本種の特徴を記載・図示し、本種の再発見に向けて、甲虫愛好家の今後の注意を喚起することとした。

コットンヒメアメイロカミキリ *Longipalpus cottoni* DE KEYZER et NIISSATO, 1989

*Longipalpus cottoni* DE KEYZER et NIISSATO, 1989, Jpn. J. Ent., 57, p. 334, fig. 1; type locality: Doi Pui, near Chiang Mai.

九州産♀個体に基づく記載。体長4.7mm。体は黒褐色で艶がなく、頭部は黒色、上翅はくすんだ栗色、触角と肢は明褐色、触角5~7節の基部付近はより白色。体全体に半透明の微毛をそなえるが肉眼では目立たない。前胸背板基部と中央前後の側縁、上翅基部付近に銀白色毛をそなえる。上翅中央に銀白色毛からなるやや斜めの横帯をそなえる。頭部は前胸背板前縁の1.3倍の幅で、上翅肩部と同幅、表面は細かな顆粒状で点刻はない。複眼は大きく側方に張り出すが、背面で頭幅3/8の間隔で広く離れる。触角は細く、第9節の基部で上翅端を越える、第1節が最長で第3節の1.5倍の長さ、第2~4節の腹面に数本の直立毛をそなえる。前胸背板は最大幅の1.42倍および上翅の2/5の長さ、中央付近が広く緩やかに弧状に張り出し、前縁から3/10および後縁から1/5の部分でほどよく窪み、背面は細かな顆粒状で、前方と中央付近で弱く盛り上がるが目立たない。上翅は基部幅の2.8倍の長さ、側縁は中央前方まで平行、以降はやや強く拡がり、先端1/4が最大幅で基部幅の1.3倍、背面にはやや大きな8列の点刻列をそなえるが、先端1/3以降で不明瞭となり、2/11で完全に消失する。肢は比較的長く、後腿節は上翅端を越えない。

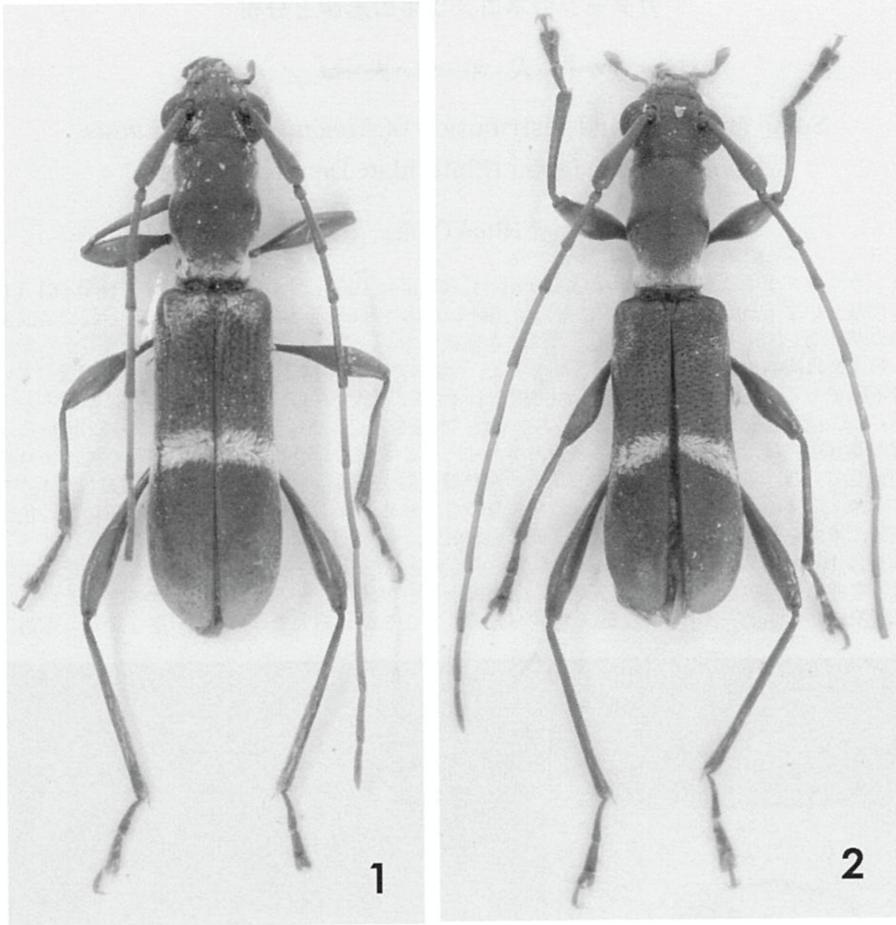
**検視標本:** 1♀、宮崎県椎葉村耳川源流(椎矢峠から宮崎県に5km)、14-IX-1986、荒巻健二採集(所蔵)。バナの枯葉よりソボセダコブヤハズカミキリと同時に採集された。この個体は、採集直後に当日の同行者である岩崎正氏が現地確認をしているので、野外採集によるものであることは疑いはない。なお、採集状況は荒巻(2004)に詳しい。

**比較検視標本:** タイ北部産2♂♂, 1♀ (*Longipalpus cottoni* の副基準標本群)(新里所蔵)。

九州産の検視標本は基本的にはタイ北部産と相違はない。ただし、体は全体にやや短太、頭部に点刻をそなえない(タイ産は後頭前方に明瞭な点刻をもつ)、前胸背板は短く最大幅の1.42倍(タイ産は1.5倍前後)、上翅の後方の張り出しはより弱く、点刻はやや大きく先端2/11で消失する(タイ産はむしる細かく1/6で消失)などの違いが認められる。これが地理的変異なのか単なる個体変異であるのか、現時点では明確に結論づけることはできない。

本報告の目的とは異なるが、DE KEYZER・NIISSATO(1989)の原記載では触れられていない本種の所属について、この機会に若干の論考を加えておきたい。

本種は黒色で上翅中央に銀白色微毛からなる一条の斜帯をそなえることで、ヒメアメイロカミキリ属の他種とは容易に識別できるが、いっぽう、その所属においては真にヒメアメイロカミキリ属 *Longipalpus* であるか、その正確な同定は難しい。というのも、ヒメアメイロカミキリ属は南太平洋の海洋島を中心に繁栄するものの、系統的に多様な種を包含する多系統群とされるからである。また、本属の種は大陸の山岳地には本種以外は分布しておらず、唯一台湾南部の山岳地に分布する *L. tahuensis* CHANG が内陸に分布する種として知られている。また、銀白色の微毛紋による上翅の斜帯も本属のなかではまったく異例の形質である。ヒメアメイ



ロカミキリ属の近縁属には、*Pseudiphra*、*Iphra* および *Chinobrium* が知られるが、このうち *Pseudiphra* だけには本種のように上翅の微毛紋を有する種が知られている。実際に、日本のカミキリムシに馴染みの深い私たちにとっては、本種の外観はツマグロアメイロカミキリ *Pseudiphra apicale* SCHWARZER などをむしろ彷彿させるであろう。いずれにしても、種の所属も含めてこれら近縁群の定義については、いずれ解決しなければならない問題であるといえよう。

#### 参考文献

荒巻健二, 2004. 謎の Obrium. 天牛通信, (11): 10.

KEYZER, DE R., & T. NISHITO, 1989. An additional species of the genus *Longipalpus* (Coleoptera, Cerambycidae) from Thailand. *Jpn. J. Ent.*, 57: 333-336.

(新里: 東京都国分寺市; 荒巻: 福岡県久留米市)

## カタモンカネコメツキの形態と分布

大平仁夫

Some structure and distribution of *Limoniscus rufovittatus*  
from Honshu, Japan (Elateridae: Dendrometrinae)

Hitoo ÔHIRA

カタモンカネコメツキ *Limoniscus rufovittatus* は、ÔHIRA (1963) が長野県美ヶ原山で採集(14. VII. 1954)した1♂に基づいて *Gambrinus* 属の新種として記載した体長9.5 mmの個体である。原記載には成虫と交尾器と触角の基部節を図示している。原記載以降に本種は栃木県、茨城県、岐阜県、新潟県などから記録されているが、日本には複数の類似種が分布しているので、記録のすべてが本種を正しく同定して記録しているのかどうかは不明である。また、愛媛県東赤石山で得られ1♀を、大平・白石(2001)は暫定的に本種として記録しているが、これも未記載の別の類似種であった。また、本種を♂として記録したのは、岸井(2001)による岐阜県根尾村能郷(現在は本巣市能郷)からの報告があり、ここでは「上翅の赤黄色縦紋が幅広く、より赤味が強い」と記述している。筆者はこのたび、岐阜市の豊島健太郎氏が岐阜県大野郡白川村で採集した1♂を検査することができた。前述のように本種には未記載種も含めてきわめてよく類似した近似種があるので、色彩や外形のみで正確に本種を同定することは困難なように思われる。

♂の体長は10 mm内外。体は黒色で鈍い真鍮色の金属光沢を有し、触角は黒色で肢は暗褐色。上翅は肩角部から後方に伸びる濃橙色の带状縦斑を有し、縦斑は上翅の半ば付近までは明瞭に印するが、その後は細まって漸次不明瞭になるか消失する(Fig. 1A)。触角は短く、第2, 3節は短大でほぼ等長、第4節から鋸歯状を呈す

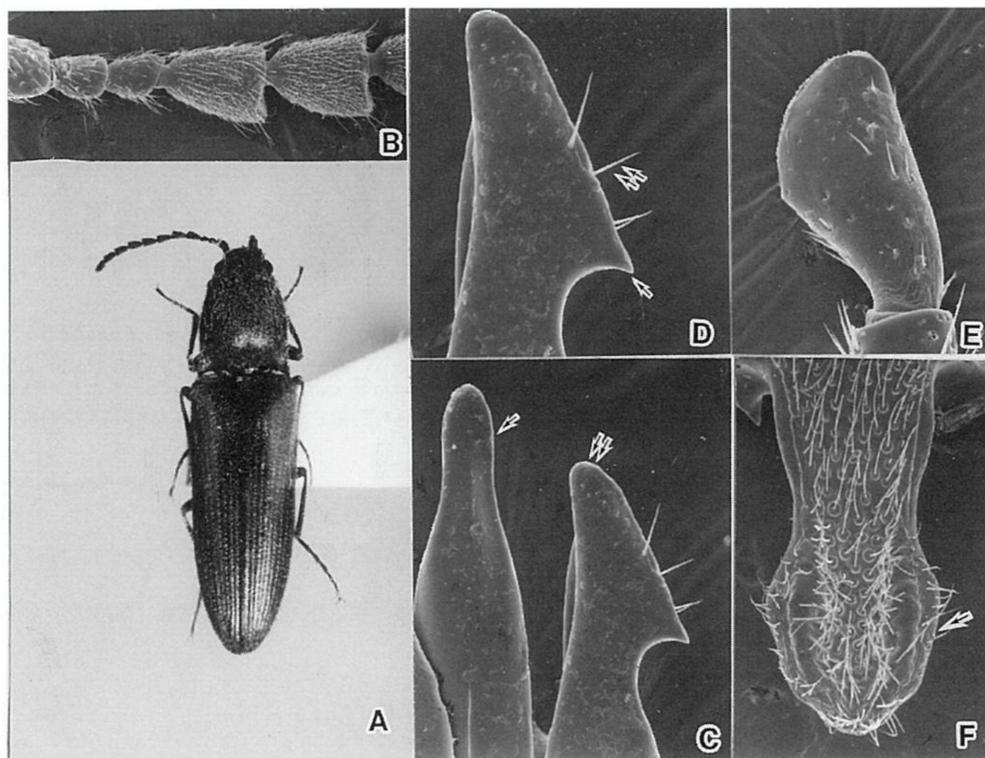


Fig. 1. A-F, *Limoniscus rufovittatus*, ♂: A, body length 9.8 mm; B, 2nd to 5th segments of left antenna; C-D, apical portion of male genitalia, dorsal aspect; E, right apical agement of maxillary palpus; F, prosternal process, ventral aspect.

るが、第4節はこれら第2,3節を合わせたものほぼ等長であり、第5節は第4節よりやや短い (Fig. 1B)。小顎枝の末端節は細長く、末端に漸次扇状に広がるが、末端は緩く外方に湾曲する (Fig. 1E)。前胸腹板突起の腹面から見た末端部の膨らみは顕著である (Fig. 1F↑)。交尾器の背面からの外形は図示したようで、中央突起は太く、末端近くの両側は平行状で、末端部は湾曲して細まり、とがらない (Fig. 1C↑)。また、側突起の末端部の三角状部は幅より長く、末端は湾曲している (Fig. 1, C↑)。また、その側縁は直線状で、後角は短く後外方にとがる (Fig. 1, D↑)。その他、末端部には短い感覚毛を外縁部に沿って3~4本生じる (Fig. 1 D↑)。

本種の一般外形は、タテスジカネコメツキ *L. vittatus* に類似しており、これに近縁の種のように思われる。しかし、♂交尾器や触角の基部節などには明瞭な差が見られるし、頭部や前胸背板の点刻の分布にも差が見られる。こんご、♀の形態が判明したうえで、これらの近似種との識別点についてもより詳しく調査したいと考えている。ここでは、本種の♂の形態の一部を明らかにするとどめる。

終わりに、本種を採集して提供をしていただいた、岐阜市の豊島健太郎氏に厚く御礼を申しあげる。

調査標本: 1♂, 岐阜県大野郡白川村大白川, 15-VI-1997, 豊島健太郎採集。

分布: 本州 (関東から中部・北陸地域の山岳地帯)。

引用文献

岸井 尚, 2001. 三重県産コメツキムシの記録 (6), 官能健次氏の蒐集資料について. *ねじればね*, (93): 3-12.  
 ÔHIRA, H., 1963. New or Little-known Elateridae from Japan. VI. (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 8(1): 15-18.  
 大平仁夫・白石正人, 2001. 愛媛県東赤石山のコメツキムシ類について. *徳島昆虫*, (12): 1-17.

○台高山脈における Bolitophagiini 族 (ゴミムシダマシ科) のライトトラップへの飛来例

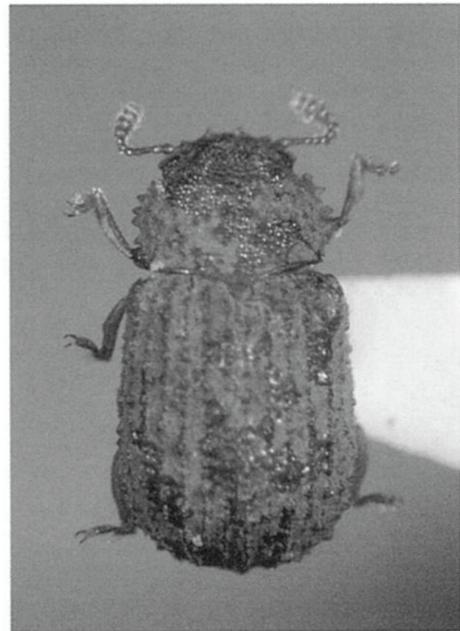
ゴミムシダマシ科 Bolitophagiini 族各種の灯火への飛来例は一般に少ないと思われるが、奈良県内の台高山脈で行ったライトトラップ調査で、これまでに以下の3種の飛来を認めたので報告する。

なお、トラップの構造は、幅約2m、高さ約1.5mのスクリーン式で、主な光源として、250W水銀灯1灯、20W直管ブラックライトおよびケミカルライト各2灯を使用した。採集者はすべて木村である。本報告に用いた標本はすべて橿原市昆虫館に保管されている。

1. ニセコブスジツノゴミムシダマシ *Boletoxenus incurvatus* (LEWIS)  
1♀, 奈良県上北山村, 11-VII-2006
2. キムラチビコブツノゴミムシダマシ *Byrsax kimurai* MIYATAKE  
1♀, 奈良県上北山村, 11-VII-2006
3. クロソンマグソコガネダマシ *Bolitotrogus kurosonis* MIYATAKE  
1♂, 奈良県川上村, 24-VII-2003

本報告のなかで、クロソンマグソコガネダマシは高知県黒尊溪谷を基産地として、1964年に宮武睦夫博士により記載された種であるが、その後追加の報告を聞かない。また、基産地を含む四国以外の地域からの報告もない。したがって今回の記録は本種の本州からの新記録と考えられる。報告者の一人、安藤は最近この基産地を訪れたが、森林環境は大きく変化しており、その大部分は杉などの植林に占められ、本種を採集することはできなかった。この環境の改変状態を勘案すると、今後基産地での本種の採集は困難であろうと考えられる。

ここに報告したクロソンマグソコガネダマシ個体は、同定に用いた副模式標本との相違はまったく認められない。本種の種名確定時に比較標本を手配い



ただいた愛媛大学農学部の酒井雅博博士、石川春子氏のお二人に厚くお礼申し上げます。

引用文献

MIYATAKE, M., 1964. Notes on the tribe Bolitophagini of Japan, with the descriptions of four new genera and two new species (Coleoptera: Tenebrionidae). *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 8: 59-84.

(橿原市昆虫館, 木村史明;  
大阪府豊能町, 安藤清志)

## ○ヒダカノミゾウムシの分布および成虫採集記録

ヒダカノミゾウムシ *Orchestes (Orchestes) hidakai* (Morimoto, 1984) は、長崎県雲仙市小浜で、コケのシフティングによって得られた1雌を基に記載され、その後、採集記録がない極めて珍しいノミゾウムシの1種である。

筆者は和歌山県古座川町の北海道大学研究林においてフォギング法を用いたイチイガシ *Quercus gliva* の調査を行い、比較的まとまった数の本種成虫を得たので記録しておく。

20 exs., 和歌山県古座川町北海道大学研究林 (N33°40', E135°40'), 3. V. 2006, 筆者採集 (フォギング)。

分布: 本州 (和歌山)—新記録, 九州 (長崎)

イチイガシは樹高が30 mにも達する高木で、林冠部を対象とした昆虫類の調査はこれまでほとんど行われていなかったと考えられる。今後、イチイガシに注意することで、本種の分布の空白地域からも見つかる可能性がある。

本種は、暗赤褐色地に灰色鱗毛による不明瞭な斑紋を装い、奄美大島から記載されたハイマダラノミゾウムシ *Orchestes (Orchestes) yokoae* MORIMOTO et MIYAKAWA, 1996 に近縁で、両種の間関係については将来精査する必要がある。

末筆ながら、北海道大学研究林での調査に同行いただいた的場 績氏、ならびに土屋賢太郎氏、調査を行うにあたりお世話になった同研究林長の野田真人博士および職員の方々へ厚く御礼申し上げます。本



調査は、科学研究費補助金 (課題番号 16770067) の助成を受けて行われた。

(九州大学総合研究博物館, 小島弘昭)

## ○鹿児島県種子島におけるクリイロヒゲハナノミ採集例

クリイロヒゲハナノミ *Macrotomoxia castanea* PIC, 1922 は、日本では関東地方～琉球列島から記録されている (高桑, 1998, 甲虫ニュース, (123): 4)。鹿児島県種子島には当然分布しているものと予想されるが、筆者は寡聞にしてまだ種子島での記録を知らない。たまたま最近、黒佐和義博士から恵与いただいたハナノミ標本中に種子島産の本種が含まれていたため、念のためここに記録しておきたい。

1♀, 鹿児島県中種子町増田, 14. VII. 1999, 黒佐和義郎採集。

貴重な標本を恵与くださった東京の黒佐和義博士に心からお礼を申し上げる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

## ○伊豆諸島大島におけるルリツヤヒメキマワリモドキの記録

ルリツヤヒメキマワリモドキ *Simalura coerulea* (LEWIS) は、中條 (1985) によると、本州, 四国, 九州, 佐渡, 粟島, 対馬に分布することが知られているが、伊豆諸島からの記録はないようである。筆者ら、伊豆諸島大島で本種を採集することができたので、ここに報告しておきたい。



1ex., 伊豆大島元町林道, 17-19. VIII. 2006, 小林邦彦・鈴木 互 採集 (FIT)。

報告するにあたり、種の確認をしていただいた川崎市の川田一之氏に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

中条道崇, 1985. ゴミムシダマシ科 (一部除く). 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛の編著, 原色日本甲虫図鑑 (III): 295-341 (pls. 49-58). 保育社, 大阪。

(東京都多摩市, 小林邦彦; 東京都世田谷区, 鈴木 互)

## ◇2006 年度大会報告◇

日本鞘翅学会第 19 回大会は 2006 年 11 月 18～19 日にかけて、山崎秀雄大会委員長のもと、千葉県立中央博物館において開催されました。2 日間のプログラムで、一般講演の口頭発表 15 題、ポスター発表 6 題の発表が行われました。参加者は総勢 170 名で、そのほかにも特別講演およびシンポジウムは、中央博物館の「自然誌シンポジウム」として公開で行いましたので、会員外からも多くの参加があった模様です。今年度の講演の特徴として、絶滅危惧種などの保全に関わる問題が目立ちましたが、これは、近年の自然環境の衰退とその保全の重要性についての認識が本学会でも深まってきたことによるものと思われます。そのほかにも、長年誤解されていた分類学の問題の解決や形態形質の機能や評価に関する研究や分子系統学による新たな解釈などの基礎的な研究にも注目すべきものが見られました。ここ数年の、講演内容の多様化は注目すべきものがありますが、より一層の内容の深化、発展を期待したいと思います。特別講演は大野正男先生による「分布図で見る房総の昆虫たち」で、房総半島にとどまらず、様々な生物の分布・生物地理を論じていただきました。膨大な文献の渉猟に基づいて作成された多くの分布図は圧巻で、個々の分布記録の積み重ねがいかに重要であることを再認識した方が多かったのではないかと思います。シンポジウム「甲虫相から見る千葉県一里山と海の県、茨城・千葉・神奈川の比較から一」では、茨城と神奈川との甲虫相の比較で議論が中心でしたが、ここでも個々の記録の重要性が浮き彫りにされたと思われます。

総会では、新会長に新里達也氏が推挙され、承認を得ました。また、ハネカクシの分類学的研究で著名な渡邊泰明先生が名誉会員に推挙され承認されました。今回の名誉会員の推薦は、渡邊先生の学問的貢献に付け加え、当会前身の甲虫談話会時代から長年の間、甲虫ニュースの編集にご尽力されるなど、本会の黎明期より会務にあたられ、編集委員長や会長を歴任いただいたご功績により会員諸氏の賛同を得たものです。

来年度の第 20 回大会は、初の北陸開催となる福井大学で開催の予定です。総会時に読み上げられました、次回大会運営の任にあたられる保科英人氏の案内では「決して安宿などに泊まらず、温泉旅館で越前ガニを堪能し、地元経済への貢献をお願いしたい」とのことでありましたので、会員諸氏のご協力をお願いいたします(笑)。(庶務担当 岸本年郎)

## ◇会計報告◇

## 1. 2005 年度決算 (2005 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

収 入	予 算	決 算	増 減
前年度繰越金	1,900,000 円	2,101,879 円	201,879 円
会費	4,200,000	4,247,000	47,000
広告費	60,000	0	-60,000
出版物売上金	50,000	363,550	313,550
雑収入	0	182,003	182,003
合 計	6,210,000	6,894,432	684,432

支 出	予 算	決 算	増 減
会誌印刷費 (Elytra)	2,200,000 円	2,502,325 円	302,325 円
会誌印刷費 (甲虫ニュース)	1,000,000	1,035,667	35,667
会誌送料	720,000	809,751	89,751
通信費	150,000	15,000	-135,000
事務費	150,000	196,680	46,680
大会助成費	100,000	100,000	0
予備費	50,000	99,645	49,645
次年度繰越金	1,840,000	2,135,364	295,364
合 計	6,210,000	6,894,432	684,432

## 2. 特別会計 2005 年度決算

収 入	支 出
前年度繰越金	4,916,885 円
利息	33
	ELYTRA33 (1) 1,383,200 円
	印刷費
	振込手数料 210
	ELYTRA33 (2) 311,291
	印刷費
	振込手数料 210
	次年度繰越金 3,222,007
合 計	4,916,918
	合 計 4,916,918

(会計担当、齊藤明子)

## ◇会員動静◇

(2005 年 11 月～2006 年 10 月)

◇学会の発行物・バックナンバー販売委託先◇

昆虫文献 六本脚  
TEL/FAX: 03-5625-6484  
E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp  
URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

甲虫ニュース 第 156 号

発行日 2006 年 12 月 30 日  
次号は 2007 年 3 月下旬発行予定  
発行者 高桑正敏  
編集者 鈴木 互 (編集長), 長谷川道明, 川島逸郎,  
奥島雄一, 吉富博之  
発行所 日本鞘翅学会  
〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1  
国立科学博物館昆虫第 2 研究室  
電話 03-3364-2311  
原稿送付先 (甲虫ニュース) 鈴木 互  
〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13  
電子メール: [elater@b08.itscom.net](mailto:elater@b08.itscom.net)  
印刷所 (株)国際文献印刷社  
年会費 2006 年度 7,000 円 (一般会員)  
郵便振替口座番号 00180-3-401793  
ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6  
振替 00130-4-21129  
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)  
FAX (03) 3409-6160  
(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社